
夜の散歩

まゐライオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜の散歩

【Nコード】

N7990S

【作者名】

まあライオン

【あらすじ】

谷島篤美、38歳。

女、独身。

何故か異世界に召還されました。

30代後半に召喚され、40代の女として異世界を生き抜くハートフル？異世界記。

世界観（前書き）

自分の中で若干ごちゃついてきたので、整理の意味もこめてアップします。

登場人物も、主要なキャラクターが出そろったら、随時加筆修正していく予定です。

世界観

世界観

ポピテイヤ：

篤美が召喚された世界。一組の男女神が創った。多くの人々は、これらの神々を信仰している。

一つの大きな大陸といくつかの島々から成る。

魔獣と呼ばれる獣が存在し、はぐれ魔獣と呼ばれる凶暴な魔獣は人々の脅威のひとつである。

魔法が存在しており、魔術の使える人間は多いが、使えないものもいる。

タユラ国：

篤美を召喚した国。大陸の最東端にある東部と南部が海に面し、北部西部を山に囲まれた小さな国。

目立った産業はないが、峻嶒な山脈が隣国との国境にあるため、戦はほとんどなく、人々の脅威ははぐれ魔獣と自然の猛威ぐらいである。

気候としては、平野部は年間穏やかで冬でも雪は降る事がないが、山間部の中には豪雪地帯もある。

首都は北部中央にあり、城の背後には険しい山があり、自然の城壁の役割を果たしている。城を中心として、扇状に城下町が形成されている。

タユラ国は王政であり、王を中心に貴族たちが政を行っている。

王族、特に王位継承者の婚姻は、異世界から召喚した女を娶るといふしきたりがある。建国者の嫁（初代国王妃）が異世界から偶然零れ落ちた女であったため、以来それに倣い、国家魔術師という魔術のエキスパート達が王太子が年頃になると召喚術を行ってきた。

チユルガ：

タユラ国の最西部に位置する街。

国境やはぐれ魔獣が出やすい山が近いため、厳めしい砦があり、騎士団が常駐している。

近くに山を抜ける街道があるため、人の往来は多く、田舎ながらそこそこ栄えている。

夏は涼しいが、冬は雪が多く寒さが厳しい。

時間観念

一年：360日

一日：25ティン

単位

一時間：1ティン

30分：半ティン

単位含め、細かいことは随時加筆修正していきます。

Prologue (前書き)

5 / 9 : 誤字脱字を修正しました。

prologue

谷島篤美

38歳

独身

女

学習塾講師

仕事終わりのビールと休日前の居酒屋通いが楽しみで、趣味は深夜の散歩。

彼氏なんてもう何年もいない。

そんな寂しい40手前の私が、何の因果か異世界とやらに召還された。

……ピチピチ10代のオウジサマの嫁として。

話せば長くなるから端的に اینجا。

その日、私は、動物園の猿のように授業中に騒ぎやがるクソガキ…失礼、可愛らしい生徒達に日本史と古文を教え、クタクタになって愛すべき安住の地である我が家（1DK）に帰宅した。

靴を脱ぎ散らかし、通勤バッグをベッドに放り投げ、さあ、愛しのビールちゃんのご対面！と冷蔵庫を開けた瞬間、私の意識は途絶えた。

気がつくくと、私は愛すべき我が家ではなく、冷たい石畳の上に立っていた。

私の周囲には、石畳に描かれたファンタジー漫画で見るような魔法陣が広がり、その向こうに、これまたファンタジー映画に登場するような格好の人間達が並んでいた。

RPGに出てくる神官みたいな格好をした狸みたいな顔と体格の暑苦しいオッサン、フルCG？むしろ人外？って聞きたくなるようなスнгеエ美人、中背中肉平凡を絵に描いたような若い青年、ごっつい剣を下げた赤毛のお兄さん、……以下略。

狸のオッサンが言うには、私はどうやらこの国（タユラ国というらしい）の平凡を絵に描いたような容姿の御歳18歳のオウジサマの嫁、つまりは未来の王妃様、国母になるべくして召還されたいらしい。

……ちょっと待て。

これはあれか？

今時流行ってるらしい異世界トリップとかいうやつか？

塾に通ってる女子中学生がキヤイキヤイ言いながら回し読みしてた小説みたいなノリなのか？

異世界トリップして、イケメンに囲まれて逆ハー状態になって、最終的にオウジサマと結婚しちゃいます！ってあれか？

……いやいやいやいや。

……ないないないない。

ていうか、普通こつこついうのって、女子高生とか女子大生とかセオリ

「じゃないの!？」

何故、四捨五入したら40のオバサン呼んじやってるのよ!？」

しかも、オウジサマめっちゃ普通じゃん!！」

オウジサマっていうより、モブAって感じじゃん!！」

コレは、どうしろっていうのよ!！」

ってな感じで、説明を受けて私が内心パニック状態になってたとき、
どうやら向こうも軽く騒ぎになっていたみたいだ。

途中、可愛らしいメイドさん（秋葉原にいるようななんちゃって萌えメイドじゃなく本物の）がお茶を入れてくれて、落ち着こうとお茶を啜っていると、モブAオウジサマがとんでもない爆弾を投下しやがった。

「こんな不細工な女、冗談じゃない。……とつとと追い出せ」

結果、これまでの受け入れがたい非日常（むしろこれは夢とか私の妄想とかだったらしいのに……けど太ももを全力で抓ったら普通に痛かった。……チクシヨウ、現実かよ……）とそのあまりの発言に呆然としていた私を余所に、狸オヤジや美人さんやらがモブAオウジサマの説得を試みた。しかし、平凡面のオウジサマの意思は覆さ

れることなく、私は申し訳なさそうな狸オヤジ達を背後に、ガタイのいい兵士のお兄ちゃんに両手を拘束され、散々城内を歩かされた挙げ句、文字通り城から放り出された。

……こうして、私の異世界生活が暗澹たるスタートをきったわけである。

一話（前書き）

今更ながら見切り発車です。

一話

騒がしい飯屋の店内。

さほど広くもなく、厨房の熱気や店の主人のどなり声が客たちがいるテーブルにまでそのまま伝わるような、そんな騒がしい店内で、一日の仕事を終えた街の人々が思い思いに飲み食いし、語らっている。

そんな中、テーブルの間を泳ぐように滑るようにスイスイと動き回る女がいた。

肩下程にまで伸びた黒髪を無造作に一つにくくり、浅黒い肌に地味なカーキ色のワンピースとエプロンを身に付け、酔客達に笑顔を振りまきながら、料理を運び注文をとる。

「アーチャ、ダビ酒もいっちょ!!」

「こつちも頼むわあ!」

「はいよ!ちよつと待ってな!」

アーチャと呼ばれたその女は、元気よく客に応え、これまた器用に狭いテーブルの間をすり抜け、厨房へと向かう。

「ガディさん!ダビ酒二つ追加!!」

「おう!ついでに、こいつも運んで行け!!」

「はいよあ!」

両腕に酒のなみなみと注がれたジョッキと料理の皿を持ち、テーブルを周る。

「はいよ！お待ち！！」

「おう！俺あ、仕事上がりのこれだけが楽しみなんだよ」

「だからって飲みすぎないでよ。こないだみたいに奥さんに叱り飛ばされても知らないよっ」

「がははっ！確かにこないだは凄かったな！えらい剣幕で嫁が殴り込みにきたじゃねえか！」

「あんたあ！どんだけ遅くまで飲めば気がすむの！！つてな」

同じテーブルの男が裏声を出して、声真似をすれば、周囲のテーブルの人間も野次を飛ばし、笑い転げる。女も一緒になって笑い転じた。

暗い夜道をカンテラで道を照らしながら、アーチャは歩いていった。アーチャの家は街のはずれにポツンと建った小さな家だ。周囲には森と畑くらいしかなく、集落からやや離れたところにある。

街の人々の営みの音もなかなか響かぬ、木々のざわめきと獣の声し

か届かぬ静かな場所だ。

そんなところにアーチャは一人で住んでいた。

建てつけがあまりよくなく、悲鳴をあげるように軋むドアを開けて家に入る。

台所と風呂トイレ以外は一部屋しかない、本当に小さな一軒家である。持っていたカンテラを部屋の隅にある小さなテーブルに置き、荷物をベッドに放り投げる。

そのまま台所にある貯蔵庫からダビ酒を取り出し、ベッドに腰かけ瓶のままあおる。

アーチャ、谷島篤美がこの世界に召喚されてから2年の月日が経っていた。

城を文字通り摘みだされた後、訳も分からず呆然としていたところを通りがかった女術に拾われ、そのまま娼館に売られた。

この世界のこと、社会システムも、通貨価値も、常識も、何も知らない篤美には抗うこともできず、そのままなす術もなくそこで働く他に道などなかった。

(まさか40間近で体を売るはめになるとはな……)

谷島篤美という名前は、この世界の人間には発音しにくいのか、『アチュミ』と舌足らずな呼び方になることが数少ない人との会話によって分かったので、『アーチャ・タニージャ』と名乗るようになった。

幸か不幸か、この世界は西洋系の顔立ち、体格がそのほとんどであり、東洋系の顔立ちが珍しいのか、日課であった散歩によるそこそこしまった体つきがよかつたのか、日ごろの肌の手入れが良かつたのか（ド ホルンリンクル万歳！）、実年齢よりもはるかに若く見られ、20代後半の娼婦として売り出された。黒髪黒眼、あるいは南方系の血が強いのか地黒な淡い褐色の肌が珍しかったのか、働き出してからすぐに、そこそ客がつくようになった。

それからはただただ生きていた。

食うためだけに、生きるためだけに、客として来る男たちに媚び、体を預け、金を貰う。

はじめのころは本当に辛かつた。年が年だけにそれなりに経験はあるが、何せ実年齢が実年齢だ。体力的にも厳しいし、やはり知らない世界、それまでの人生経験がほとんど役に立たぬ状況、人種の違う異世界人に抱かれることに精神的苦痛を伴つた。この状況下に落とした王族を憎んだ。しかし、それもすぐに慣れた。否、諦めた。このまま情性で売れなくなるまでこうして生きていくのかと諦めがつき始めた、そんな頃に客の一人であつた裕福な商家の隠居の爺さんに落籍された。

隠居の爺さんの名前はマルコといった。篤美はマルコ爺と呼んでいた。

マルコ爺は変わった客だつた。

娼館に来て指名する癖に一切手を出さず、話をして、時折膝の上で眠ったり、評判の菓子などを持ってきてくれたりしていた。

そのマルコ爺に落籍されて、彼が突然あつけなく亡くなるまでの約1年、彼と共に暮らした。

彼は非常に博識な人であつた。

本を読むことを好み、篤美に読み書きと、この世界の知識と、生き

ていくために必要な情報を惜しみなく教えてくれた。

彼と過ごした日々は本当に穏やかなもので、篤美は彼のことがすぐに大好きになり、憎くてたまらなかつたこの世界がほんの少し、本当に少しだけ好きになった。(王族は相変わらず憎いが……)

この世界の名前はポピティアという。

一組の男女神によって創られ、一つの大きな大陸と小さないくつかの島々から成る。

人々は創造神を信仰し、魔獣と呼ばれる獣と共に生き、元の世界じや夢物語であつた魔法が身近にある生活をしている。

篤美が召喚された国はタウラ国という、大陸の最東端にある東部と南部が海に面し北部西部を山に囲まれた小さな国である。

特に目立つた産業があるわけではないが、峻険な山脈が隣国との国境にあるからか、戦はほとんどなく、人々の脅威は人を襲うはぐれ魔獣か自然の猛威だけであつた。

首都は北部にあり、城の背後は険しい山があり、自然の城壁の役割を果たしていた。

タウラ国は王政であり、王を中心に貴族たちが政を行っている。

この国の王族の、特に王位を継承する者の婚姻は、異世界から召喚した女を娶るといふしきたりがある。

なんでも、建国者の嫁が異世界から偶然こぼれ落ちてしまった女だつたらしい。以来、国家魔術師という魔術のエキスパート達が、王太子が年頃になると召喚術を行ってきた。……異世界の人間からしてみたらいい迷惑としか言いようがない。

篤美が召喚されたのも、そのしきたりあつてのことらしい。

大抵が王太子と年齢的に釣り合う少女が召喚されるらしいが、今回は何故かはるかに年上の篤美が召喚されてしまったわけである。(

ちなみに、狸オヤジの説明の時に、元の世界に帰せと胸倉つかんで喚いたら、召喚は一方通行なものであり、帰す術はないと言われた）ちなみに、勝手な理由で篤美を召喚した揚句、不細工だからと放り出したモブAオウジサマは、その後若くて可愛らしい少女を召喚して、無事結婚したらしい。

その話を聞いた時、聞くに堪えない罵倒が飛び出したのは致し方がないことである。

マルコ爺が亡くなった後は、娼館あがりの女に商家に居場所があるはずもなく、住みよい場所を求めて旅に出た。幸い娼婦時代に稼いだ金とマルコ爺が遺してくれた金があったため、彼が遺したいくつかの本を携えてすぐに旅立つことができた。

二か月ほど旅をし、今の街に小さな家を買って落ち着いたのは、つい半月前である。

国の最西部にあるチユルガという街で、国境やはぐれ魔獣が出やすい山が近いため、厳めしい砦があり、騎士団が常勤している街であるが、そこそこ栄えた大きな街である。

余所者が紛れ込んでみさほど気にされず、飯屋の店員という職もすぐに見つかった。

昼前から深夜まで働き、その帰り道に散歩がてら少し遠回りをして帰るとというのが、篤美の生活になった。

休みの日は猫の額ほどの庭で、ハーブを育て、マルコ爺が遺した本を読むという、一人だけの物静かな暮らしをしている。

ようやくこの世界に馴染み始めることができた。

一話（後書き）

いきなり二年後・・・

二話（前書き）

PV20000ありがとうございます!!

これを励みに頑張ります!

5/9:誤字脱字・誤表記を修正しました。

二話

ダビ酒を一息に飲み干し、大きく溜息をつく。ベッドのヘッドボードから煙草を取り出し、着火具で火をつける。大きく吸い込み細く吐き出す。薄青みがかかった紫煙が立ち上る。

一日の仕事を終え、一息つくこの瞬間が好きだ。

ダビ酒は地球でいうビールの様なもので、ダビという穀物から作られる発泡酒である。日本のビールよりも苦味は少なく、ベルギービールの様なフルーティさがあり、初めて飲んだ時以来好物になった。

若いころから酒と煙草があれば、どこでも生きていけると豪語していたが、まさしくである。

人間、年をくつていたとしても、基本的には順応能力が高い生物なのである。元の世界と共通する酒と紙煙草があれば尚更だ。

(酒と煙草が友達なんざ、枯れてるとしか言いようがないけどね。)

ベッドに座り、壁に寄りかかりながら煙草をふかす。

明日は10日ぶりの休みだ。

庭のハーブの手入れをするか、少し気合を入れて掃除でもするか。

休みの日に一緒にどこか行ったりする相手はいないのか、と聞くことなかれ。

元々、人間関係に積極的な方ではないし、マルコ爺の御蔭で一応この世界の常識は知ってはいるが、男でも女でも、おそらく深く付き合う仲になったら間違いないどこかでボロが出る。

自分が異世界から召喚された人間だということは、マルコ爺にだけしか言っていない。
言うつもりもない。

この年になれば、恥の一つや二つ（異世界から嫁として召喚されたのに、不細工だからと城を放り出されたなんて世間的には十分恥だろう）を晒したところで痛くも痒くもないが、なんせこの国の王族が関わっていることである。へたなことを言っただけで面倒事に巻き込まれたらたまらない。

そりゃあ、10代20代の若いころだったら、違ったかもしれない。古馴染みの人間には、お前ほどアグレッシブな奴は見たことがない、と言われる程、色んな意味で活動的だったから、復讐がてらこの国を改革したらあ！とノリとテンションだけで何かやらしたかもしれない。

しかし、もう若くないのだ。38でこの世界に来て、なんだかんだで2年も経って。

もう40なのだ。アラフォーなのだよ。

何かし返してやろう、なんて気力も湧かなけりゃ、そんな体力もない。

毎日を平穩に静かに暮らせたならそれで十分な訳である。

人生の折り返し地点は過ぎてしまった。後はただただ穏やかに老いるのみである。

カーテンの隙間から差し込む朝日で目が覚めた。せつかくの休みなのに、普段通りの時間に起きてしまう。若いころは二度寝、三度寝は平気でしていたのに、最近じゃ二度寝しようと思ってもできない。

(やれやれ、これが年をとるってことかね……)

朝っぱらから年齢を考えさせられ、ちよっぴり鬱な気持ちになりながらも起き上がる。

シーツを剥ぎ取り、他の洗濯物と一緒にする。

朝食をパンとタルシユという林檎の様な果物で簡単にすませ、家の裏にある井戸で洗濯をする。

市販の粉末状の石鹼に乾燥させたハーブを混ぜたオリジナルの石鹼をつけ、洗濯板に服やシーツを擦りつける。

ふわりと立ち上る、清々しいレモングラスの様な香りを楽しみながら、こちらに来るまで大好きだったブリティッシュバンドのナンバーを口ずさむ。

ノリノリでフルコーラス歌い終わるころには、すすぎも脱水も終わり、家の軒下に付けた金具と庭の木を繋ぐロープに洗濯物を干していく。

今日は雲ひとつない快晴だから、きっと昼過ぎには乾くだろう。

今夜、太陽のにおいがするシーツで眠れるかと思うと、すごく気分がよくなった。

延々、知っている歌を口ずさみながら掃除をし終える頃には、昼近くなっていた。

(せっかく天気も気分もいい感じだし、昼はどこか店で食べるか。ついでに買い物して帰ろう)

財布をワンピースのポケットに突っ込み、鍵を閉めて家を出る。

家から街の中心部までだいたい5キロ程あるが、基本的に歩くことは好きなので通勤も買い物も苦ではない。

たらたら歩きながら、途中に生えている草や畑の様子を眺めながら歩く。

大学生の頃は文化人類学を専攻していたからか、街の人がどんな暮らしをしているのかを観察することがちょっとした楽しみになっている。

異世界での生活も、異文化へのフィールドワークと考えれば、中々楽しめるものである。……そう思えるだけの余裕が、2年もいればできた。

約1時間ほどかけて飲食店が多い街中まで来た。

昼時だからか、食欲をそそるいい匂いをさせている店が多かった。

騎士団が常駐するチュルガの街は、言わば単身赴任の様なものである騎士たちや国境に面しているため旅人の往来も多く、そんな人たちを対象にした店舗が多く軒を連ねている。

安くて美味しい店を探すのが、この街に来てからの楽しみの一つである。

人通りの多い街のメインストリートを歩く。今日は月に一度の市が立つ日であるので、普段以上に人が多い。

人とぶつからぬようにして歩くが、時折肩や荷物がぶつかったりした。

安くてうまそうな店を探しながら、途中、どこものかは知らないが派手な仮面が売られている出店があり、興味を引かれてふらふら

近寄ろうと人ごみを横切つていこうとした。

すると、ふと道の端の方で人が蹲っているのが見えた。

いくら騎士団が常駐してしようと、出入りする人間が多ければ治安は悪くなる。特に路地裏などには、素人さんは近寄らないが吉である。

見たところ旅装の若い男のようだが、フードの下からかすかに見える顔色は真っ青だった。

普段の篤美ならそのままスル　してしまいが（面倒事に巻き込まれたりしたらたまらない）、今日の篤美は気分がよかった。

気まぐれに、というよりも完全にその場のノリで蹲る若い男に声をかけた。

「あの、大丈夫ですか？」

声をかけられた若い男はのろのろと青白い顔をあげた。

たれ目がちだが、全体的にそこそこ整った顔をしている。イケメンと普通を足して2で割ったような顔立ちだ。

浅黄色の様な水色の瞳が印象的である。

「す、いません。この、近くでや、すめる、ところ、は・・ない、ですか」

息も絶え絶えな様子に、篤美の眉間に軽くしわが寄る。

「ありやー、大丈夫じゃなさそうね。休める所に連れて行っただげから。ほら、立てるか」

「すい、ま、せ……オロロロ」……

……若い男の正面に立ち、手をとった瞬間に吐瀉物を吐き散らされた。

一話（後書き）

最後、汚くてすみません・・・orz

三話（前書き）

PV5000アクセス、ユニーク10000アクセスありがとうございました。
います！

精進していききたいと思います。

誤表記を訂正しました。（5/6）

三話

街のほぼ中央部に位置する広場。

大きな泉があり、市場からやや離れた所にあるため、人の往来も穏やかで街の人々に休憩所のような憩いの場となっている。

滝ゲロ……失礼、吐いてしまった若い男を引きずるように連れて、篤美はここに来ていた。あの場から一番近い水辺がここしかなかったからだ。

泉の水で汚れた服をある程度清め、持っていたハンカチを冷たい水に浸し、少しだけゆるく絞る。

若い男は木陰があるベンチに寝かせた。吐いたからか、少し顔色がマシにはなっていたが、未だに青白く、ぐったりと目を瞑っている。

篤美が濡れたハンカチを若い男の額に置くと、のろのろと目を開けた。

「大丈夫かい？」

「……あんまり」

「だろうね、その様子だと。その格好だと旅の人っぽいけど、宿は決まってるのかい？」

「……宿、ではなく、砦に用が、あつて……」

「砦、ね……。ん、分かった。じゃあ、適当に巡回中の騎士様を連れてくるからここで休んでな。一人にしても大丈夫かい？」

「……すい、ません……大丈夫、です」

「んじゃ、行ってくるわ。……ああ、いかん。忘れるところだった。あんた名前は？」

「バルト……バルト・クエーツです」

「バルト・クエーツね。ん、覚えた。じゃあ、行ってくる。大人しく寝てなよ」

そうバルトという若い男に声をかけ、砦に向かって小走りで駆けだす。広場からだと、砦は歩けば小一時間かかるが、走れば20分くらいのものだろうか。

ああは言ったものの、そう簡単に巡回中の騎士を捉まえることができるとは思えないため、最初から砦を目指した。

この街に来て、約半月。自分の生活範囲外を探索するほどの余裕はあまりなかったため、位置は知っていても実際に砦まで行くのは初めてだ。

体調が悪い人間のためであるから、やや不謹慎ではあるが、初めて見ることになる砦に少しだけワクワクした。

15分ほど走っただろうか（といっても、途中からジョギングペース。40代突入の体力の衰えっぷりを舐めたらいけない）砦と思わしき石造りの壁が見えてきた。

中世ヨーロッパを描いた映画に出てくるような、石の砦だ。城壁には、矢を射るために使うと思われる四角い小窓がいくつもあり、城壁の上には四方に物見用の塔があった。

(まあ、これで日本の城みたいだったら、その方が驚きか。しかし、意外とでかいな)

街の方にある門に着いた。城壁の周りにはお堀などはなく、大きな城門があり、左右に一人ずつ騎士が立っていた。

ごつい熊みたい男とそれよりやや小柄ながら逞しく鍛えられた赤毛の男だ。

熊の方がより顔がむさ苦しかったため、もう一人の方に声をかけた。

「あの、すみません」

「はい。何でしょう?」

意外と物腰の柔らかいことに軽く驚いた。騎士なんて大層なものは、威張り散らしてなんぼ、みたいに思っていたからだ。

「皆に用があるという人がいるんですけど、その人がどうも体調が悪いみたいで。今、広場にいるんでどなたか迎えに行っておあげてくださいませんか?バルト・クエーツという若い男性なんです」

「分かりました。上司に報告しますので、少々こちらでお待ち下さい。その客人の名前はバルト・クエーツでしたよね」

「はい」

篤美と熊を残して、赤毛の男は城門の中に入っていった。城門の側に立って、彼が戻るのを待つ。

妙に息が詰まる沈黙が訪れた。熊は微動だにしない。

そのくせ、妙な存在感というか、威圧感がある。

こんなことなら、最初に熊に話しかければよかつたと、よく分からない後悔をしだすころに、赤毛の男が、篤美より少し年上のこれまたごつい中年の男を連れて戻ってきた。

黒い髪を短く刈り上げ、顎髭を生やしている。取りあえず熊二号と命名してみた。

「お前さんか、知らせにきたのは。クエーツの知り合いか？」

「いいえ、クエーツさんが道に蹲ってたので声をかけたら、……なんとというか、ぶちまけられました。しょうがないから広場まで連れて行って休ませたんですけど、皆に用があると言うので私じゃ運べませんし、連れて行ってもらうかと思ってお願いに来ました」

「そいつは災難だったな。悪いな、うちの客人が迷惑かけて。迎えに行くから、一応あんたも付いて来てくれ」

「分かりました」

「俺はここを任されてるディリア騎士団の副団長をしているケディ・イザークだ。あんたは？」

「アーチャ・タニージャです。ガディさんという方のお店で働いています」

熊二号は副団長様でした。……管理職だろうとは思ったが、まさかトップ2がいきなり登場するとは思わなかった。

よくよく熊二号を観察してみれば、確かに城門にいた二人より上等な服を着ているし、肩のところに他の二人にはない紋章の様な刺繍があつた。

腰には無骨な剣を差しており、革製の鞘に入っており詳しくは分からないが、パツと見、西洋の叩き切る系の剣のようだ。

他の二人もそうだが、鎧は平時だからか革製の簡素なものを身につけていた。

黒く染めてあり、胸元に獅子だか虎だか分からないが、四足の獣がモチーフである刺繍がなされている。

マルコ爺に騎士団の話も聞いたが、近衛騎士団と他に大きな騎士団が二つあることくらいしか覚えていない。

そのため、いまいち騎士団の構造やら仕組みやらが分からなかった。まあ、おそらく今回以降、騎士に関わることなどないのだから分からなくても何の問題もないが。

ガデイさんの店は言うっちゃ悪いが、騎士が来るような店ではない。

「それじゃあ、行くか」

熊二号が軽い調子でさっさと歩き出した。

身長が154センチしかない小柄な篤美と頭2個分くらい身長があるため、慌てて小走りで追いかけて、横に並ぶ。

「あの、一人で大丈夫なんですか？」

「ん〜？」

「いや、広場からそこそこ距離がありますが、一人で運んで大丈夫なんですか？」

「ああ、牛みたいなのならともかく、クエーツだろ？なんの問題もない。というより、この程度の距離をあいつ一人担いで歩けないような軟弱者はうちの団にはいないぞ」

「あ、そうなんですか」

さすが、騎士団と言う名の男だらけのマッスル集団。

現代日本の男とは鍛え方が違うらしい。

(元いた所の知り合いの男はことごとく文系だったもんなあ。下手すると私より腕が細い奴がいたからなあ)

妙に感慨深く、こちらのマッスル事情？に関心していると、熊二号もといケディ・イザークに声をかけられた。

「お前さん、ここいらじゃ見ない顔立ちだが、国外の人間か？」

「ええ、かなり離れた国から最近来ました。といっても、もう2年前ですが。この街に来たのは大体半月くらい前ですね。それまでは首都にいました」

「へえ。首都の方が暮らしやすいだろうに、なんでまたこんな田舎に？家族は？」

「仕えていた人が亡くなったので、新しい仕事を見つけなきゃいけないになりました。どうせなら新しい土地に行つて、心機一転頑張ってみようかな、と思つて旅をしてたんですけど、ここが存外居心地が良さそうだったんです。家族は故郷にいますよ。ただ、この国にいるのは私一人ですね。結婚もしてませんし」

嘘はついていない。

ただ、これ以上突っ込まれても面倒なので、別の話題をふつた。

「この街に来たばかりで、まだ街のことに詳しくないので、女一人で歩いて危ない場所とかつてあるんですか？」

「そうだな……一応俺らが目を光らせちゃいるが、市場あたりは、スリだの引つたくりだのが多いな。路地裏は行かない方がいい。たまにヤバい奴らがいたりする。あと、街の東にはちよつとしたスラム街みたいになつてるゴロツキの溜まり場があるから、行くのはお勧めせんな」

「なるほど」

「祭りのときなんかも、人が増えるからもめごとも増えるな」

「あんまり治安つて良くないんですか？」

「基本的にヤバい場所にさえ行かなけりゃ、そうでもない。首都に比べりゃ、田舎なだけにのんびりした奴も多いから平和つちや平和だ」

「よかった。なんとなく居心地よさそうっただけで決めちゃったから、正直治安がどうなのか、不安だったんです」

「冬にゃ、雪も多いが、慣れれば確かに暮らしやすい街だぜ」

「ふふふ……ならよかったです」

話題変換ついでに街の情報収集をしていると、意外と早く広場についた。

そういえば、行きとはルートが違ったようだが、近道でもしたのだろうか。

熊二号に合わせて（熊二号には女性に歩幅を合わせるという概念はないらしい）やや小走りで歩いてきたせいもあるだろうが、行きの三分の二くらいの時間で広場に着いた。

木陰のあるベンチに目をやると、相も変わらずぐったりした様子で、バルト・クエーツが横になっていた。

「クエーツさん、騎士様をお連れしたよ。起きられるかい？」

「よお、久しぶりだな。クエーツ」

額のみならず目の上をも覆っていたハンカチをのろのろと外すと、クエーツは少し驚いたように目をパチパチとさせた。少し休んでいたからか、顔色は大分マシになっていた。

「あ、イザーク副団長。お久しぶりです」

「来るのが遅えと思ったたら、案の定か、全く。もうちよい身体を鍛えろよ。」

「……うう、す、すいません」

「こっちのお嬢さんにちゃんと礼をしろよ。服も汚しちまったんだろ」

「う、はい。重ね重ね申し訳ありませんでした」

少し頭をフラフラさせながらクエーツが篤美に頭を下げた。

「別に礼はいらないよ。私がしたくてしたことだからね。お迎えも来たことだし、私は帰りますよ。お大事にね」

「悪かったな。こいつのせいで」

「いえ、気にしないでください。では、失礼します」

「あの、ありがとうございます」

「どづいたしまして。じゃあね」

なんだかんだで夕暮れ時に差しかかり始める時間帯になっていたた

め、二人に軽く会釈して市場の方に歩きだす。
食糧を買って、早く家路に着かないと夕食が遅くなってしまふ。
今日は人助けをして、皆も初めて見て。
なんだかいい気分で足取りも軽く、家路を急いだ。

四話（前書き）

今回は非常に短いです

四話

篤美は一人夜道を歩いていった。

仕事が終わりに、いったん家に帰った後、夜の散歩へと繰り出したのである。

普段は通勤そのものがある意味夜の散歩状態ではあるが、この日は何か物足りなく感じ、荷物だけを部屋においてふらりと出掛けてみたのである。

青みがかった月が中天に差しかかる頃合いである。

今夜は満月であるから、カンテラも必要なく、青白い月明かりに照らされた道を歩く。

普段は街の方向にしか、歩を進めないため、今夜は街の外、森の方向へと歩いていった。

右手に鬱蒼とした森があり、左手に畑が広がる道をただ歩く。

篤美は歩く事が好きだ。特に静かな夜は。

黙々と足を進めていくうちに、頭の中にある様々なことが消え去り、ただ無心になる。

その瞬間がたまらなく好きだ。

右足と左足を交互に前に出す単純作業。

歩みを邪魔するものなど何もなく、今夜は獣達の声も聞こえない。ただ静寂だけが世界を支配していた。

体感時間的に1時間程、歩いただろうか。

ふと、森の中に目をやると、森の中が白い光を放っていた。

（なんだありゃ）

好奇心がむくむくと湧きあがり、夜の森に入る危険性など考えずに道を逸れて森へと入る。

ガサガサと下草をかき分け、木々の折り重なるような葉っぱに月光が遮られて視界の悪い中を時折顔や腕にあたる木の枝を除けながら進む。

5分ほど進むとひらけた所に出た。

その場所の様子は、幻想的としか言いようがなかった。

スズランのような形の、しかし花の大きさは水仙程ある白い花をつけた植物が、視界いっぱい月に月の光を受け止め白く発光していた。

自分の身体がふるりと震えるのが分かった。

急速に目頭が熱くなったかと思ったら、ポタリポタリと顎を伝って涙が落ちた。

目の前の光景に、言葉にできない程の感動を覚えた。

元いた場所では、決して見ることができなかつた光景。

その幻想的な様子にただ立ち尽くし、涙を流すことしかできなかつた。

四話（後書き）

やっと夜の散歩の描写が書けました。

五話（前書き）

PV15000アクセス、ありがとうございます！

五話

がさがさがさがさっ

それすらも幻想的空間を作り上げる要素の一つであった静寂を壊すような音が響き渡った。

ハッと現実に戻される。

どれほど立ちつくしていたのだろうか。

時間の確認のために空を見上げる。中天にあった月はその場所を少しだけ変えていた。

思ったより時間は経っていないようだ。

しかし、明日（いや、もう今日か）も仕事であるから、もう戻らなくては不味いし、何より今の物音が気になる。

生き物が草をかき分けて進むような、そんな音だ。

そこまで音が大きく聞こえないため、おそらくまだ離れたところにいるのだろう。

しかし音は未だ続いているし、少しずつ、確実にこちらに近づいてきている。

獣か、人か

どちらにせよ不味い。

獣の対処の仕方などろくに知らないし、はぐれ魔獣だった場合は最悪食われて死ぬ結果になる。

はぐれ魔獣が恐れられているのは、人を喰らうからだ。

食われて死ぬのは勘弁してもらいたいし、仮に獣でなく人であつても厄介だ。

こんな時間に一人で森にいる篤美が言えたものじゃないが、この時期にこんな真夜中に森の中にいるなんて普通じゃない。

近隣の住民は基本的に農耕を主たる生業としているため、狩りを行うのは冬間近の時期からだ。

今はもうすぐ夏に入ろうという季節。狩りの季節ではない。

しかも、森ははぐれ魔獣が出る山と近接しているため、実は昼間でも近隣の人間は近寄らない場所であつたりする。

ということは、今この森にいるであろう人間は厄介な存在である可能性が極めて高いことになる。

今さらながら、こんな所にほいほい入ってしまった自分の抜け作つぷりに後悔しか湧き起こらない。

できるだけ物音を立てぬよう、慎重にそろそろその場を離れる。

美しい幻想的な空間に後ろ髪を引かれる思いはするが、それ以上に面倒な状況に陥りたくはない。

篤美は穏やかな余生を過ごすために、この街へと来たのだ。

この世界に召喚されたことだけでもう一生分の面倒を抱えてしまつたようなものなのだから、これ以上、危険とも面倒事とも関わりたくないのだ。

月の角度が変わつたからか、来る時よりあきらかに視界が悪くなつてはいたが、幸い方向感覚はしっかりしているし、歩きやすいよう下草を踏み分けて歩いてきたので、なんとか帰りの道は分かる。

音は確実に先ほどまでいた場所に近づいてきている。

焦り駆けたくなる気持ちを押し殺し、慎重に歩みを進める。

焦りのあまり走って、道を間違えた挙げて森の中で迷う羽目にだ

けはなりたくない。

（冷静になるのよ、私。クールよ、クール）

自分に言い聞かせながら、下草をかき分け、枝や蔓を手で除けて進む。

後ろから小さく聞こえる、がさがさつという音以外は自分の呼吸音しか耳に入らない。

自分の呼吸音がやけに大きく感じ、もしかしたら後ろのナニカに気づかれるのではないか、と意識的に呼吸を細くする。

そうこうしているうちに、木々の間からちらちらと開けた空間が見えた。

道だ。

少しだけ歩くスピードを早め、最終的に飛び込むようにして道に躍り出る。

目の前に広がる畑と月明かりに照らされた家々の様子に、ほっと息をつく。

後ろで聞こえていた音はもうほとんど聞こえなくなっていた。

ただ、木々が風で揺れ、葉どうしが擦れ合うさわさわという音しか聞こえない。

ナニがいたのかは定かではないが、とりあえずは回避できたのだらう。

しかし、油断はできない。あの幻想的な場所は、道からそう離れてはいなかった。

森からナニカが出てくる可能性も捨てきれない。

篤美は急ぎ足で帰路についた。

暑苦しい熱気と喧騒に包まれたガディの店の中。

今日も今日とて、篤美は店の中をくるくると泳ぐように滑るように軽快に動き回っていた。

酔っぱらい達を軽くあしらひ、注文を取り、酒や料理を運ぶ。

時折、常連達の会話に混じり、冗談を言っで一緒に笑う。

しかし、笑うその顔には、目の下に薄らと隈があった。

……結局、無事帰りついた後も、あの目に焼きつくような森の幻想的な光景と、森にいたナニカが気になり、ほとんど眠れなかったからだ。

寝不足で重たい身体を、そうと分からぬように軽快に動かし、笑顔を振る舞う。

この年になると、ちょっと不摂生な生活をしたり、長時間日光の下にいたりすると、すぐに隈だのシミだの皺だのができてしまうのだ

が、手入れしようにも元の世界にあつたような化粧水なんてものは無きに等しいようなものである。

元の世界でなら、このような薄い隈ならコンシーラーとファンデーションで十分ごまかせたが、ここではそうはいかない。

一応、化粧品も白粉だの口紅だのがあるが、明らかにカバー力が劣り、基本的に娼婦時代以外はすっぴんで通していた。

こちらの世界に来たばかりの頃は、それまでの長期的努力のおかげで若々しい肌をしており、大きくサバを読んで20代ということにしても何の疑問も抱かれなかったが、今ではすっかり草臥れ（嫌な表現だ……）、こちらの世界の人間に比べて幼く見える顔立ちであるということ差し引いても、十分本当の年齢に近く見られるようになっていた。

しかし、無理に若づくりしてキャピキャピ振る舞わなければならなかった頃より、年相応に振る舞える今の方がはるかに生きやすかった。

（正直ここで若づくりしたり、色気づいてもね……何にもならないわなあ）

篤美の年齢だと、女は平均16歳くらいで結婚して子供を生むこの世界じゃ、大年増もいいところだ。

この世界じゃ孫がいたっておかしくない年齢なわけである。

男に媚を売って生活していた娼婦時代（すでに篤美の中では暗黒歴史）を除けば、自然と男女のそれから遠ざかっていった。

元々、着飾る趣味もなければ化粧も礼儀程度にしかしていなかった。彼氏がいるときはそれなりに気を使ったが、それもすぐに面倒に感じるようになり、徐々に手ぬきになっていくのが毎日のことであつた。

何人が付き合った男はいたが、そこまでの縁はなかったのか、結局一度として結婚することなく別れていった。

このまま、一人で気楽に残りの人生を過ごすのも悪くないと思いはじめた頃に召喚されたのだが、その思いは今も変わることはない。

こうして騒がしい店で働いて、常連のオッサン達と馬鹿話して、たまに夜の散歩に行ったりして。

それだけで十分楽しく、残りの人生が過ごせるだろう。

……話がそれたが、結局、昨夜の出来事は誰にも話さなかった。きつと時間が経てば、ちょっととした冒険譚のようなものになるだろう。

あの時にいたナニカは気にならないといったら嘘になるが、平穩を望む身としては首を突っ込まないのが吉だ。

夜の散歩に行っても、もう森には入らないようにしよう。

そう、忙しく働きながら思った。

六話

森での出来事があってから、十日が経った。

中々に強烈な出来事であったのだが、篤美の中では、もう記憶として薄れつつあった。

……断じて加齢によるものではない。

ただ、日々の生活にあまり関係がないことであったからだ。その間、毎日飯屋で働き、夜の散歩を楽しみつつ家に帰り、帰宅後のダビ酒と煙草を楽しむという、ルーティン化した毎日を送っていた。

もうすぐで、この街に来てから一月が経とうとしている。

ベッドの上に大きな布地を広げる。

濃い藍色の無地の布で、丁度、日本の藍染の様な色味をしている。今日の昼間、仕事に行く前の丁度昼飯時の頃に、街の中を探索という名の食べ歩きをしていた。そのときに、店の前にこれが置いてあるのが偶然目に入り、うっかり衝動買いをしてしまったものだ。

綿の様な手触りで、吸水性もそこそこありそうな、いい感じの布地

である。

うっかり衝動買いしてはみたものの、はてさて。
これをどうするか。

篤美は裁縫がすこぶる苦手であった。

というよりも、小学生の頃から実技系の教科は苦手で、『体育・音楽・家庭科・図工の順番で嫌いだ!!』と事あることに言っていた程である。

一人暮らしが長かったため、一通りの家事は嫌でもできるようになったが、裁縫だけは如何せん、からきし駄目だった。

この世界では、服飾に関していうならば一応売ってはいるが、新品のものとなると中流階級以上でないと、手が出ない値段である。そのため、一般庶民は古着屋で買ったり、自分で作ったりするのが主流である。

実際、篤美の持つ服は、マルコ爺に買ってもらったもの以外は、古着屋で購入したものだ。

既製品以外にオーダーメイドの店もあるが、それは貴族達のドレスなどを主に扱う店であり、一般庶民の篤美には違う世界のものである。

と、なれば、この布地は自力でどうにかする以外ないわけである。

考えあぐねた挙句、寝巻き用の浴衣を作ることにした。

洋服はなんだか初心者には難しそうであるし、浴衣ならばひたすら直線に布を縫い合わせていけばいい様なイメージがあるからだ。

大学時代、日本の民俗を学ぶ過程で衣食住に関して少々調べたこと

があつたという事もある。非常に曖昧な記憶しか残っていないが、着物の構造くらいはうる覚えだが一応記憶に残っている。

巻き尺なんてものは持っていないから、適当な紐を使って採寸もどきをする。

浴衣ならば、ある程度大きくても前身ごろやおはしよりで長さを調節できるから、だいたいの寸法でも問題はないだろう。

そもそも寝巻きとして作るわけだから、誰に見せるわけでもない。

元来の大雑把つぷりを発揮するような適当な採寸をして、寸法の大体の大きさに折った布地をナイフで切り裂く。

鉋は持っているが、こういうものはちょこちょこ切るより、一気にガツと切ってしまった方が上手くいく。

室内用に使っているカンテラの明かりに照らされた薄暗い室内で、ベッドに広げた布地をドンドン切り裂いていく。

部屋の中には、布ずれの音とナイフで布を切り裂く音しかしない。黙々と息を詰めるようにして作業を行う。

そう時間が経たないうちに、裁断の作業が終わった。大きく曲がる事もなく、きれいに切れたと自画自賛しつつ一服する。

切った布地をベッドの脇に置き、ベッドに腰かけ煙草を吸う。

なんだかテンションで裁断まで一気にやってしまったが、縫い始めるのは明日からでいいだろう。

そろそろ日付が変わる時間のはずだ。

明日からは仕事が終わった後の作業ができた。こうして自分で着物を作ったり、小さな庭でハーブなんかを育てたりしていると、元の世界で流行っていたスローライフのようだ。

都会大好き、便利な文化的生活万歳！な自分が、こうしてスローラ

イフを送っているということが、なんだか可笑しくて、口元が緩んだ。

煙草を一本吸い終えて、さて寝るか、と寝支度をしていると、なんだか外が急に騒がしくなった。

なにやら慌ただしいような、人の声や馬の蹄のような魔獣の足音が聞こえる。

どうやら方角的には森の方から聞こえる。どうも森からこちらの方に向っているようだ。

音が徐々に大きくなり、近づいてくる。

何事かと、いぶかしんでいると単騎が駆けて近づいてくる音がし、家の前で止まった。

（おいおい……こんな時間に一体何事だ？）

すると、トントンというよりも、ドンドンツとノックするには些か激しすぎる力で家の戸が叩かれた。
何となく息をひそめる。

（……何だろう、面倒事の臭いがする……）

こんな真夜中に、という以前に、篤美の家に客人が来たことは一度

としてない。

ガデイさんには一応雇い主であるから家の場所を教えてはいるが、それ以外で篤美の家を知っている人間はいないはずだ。(よくあるお引越しの挨拶回りもやってないし)

ここが篤美の家と認識しての客人か、それと、単に家があったから来たのか……。

相手の正体は分からない。ばれない様にカーテン越しに窓から覗いてみても、丁度陰になっているのか、月明かりにうつすら照らされたトユールという、馬と犬系の動物を足して二で割ったような騎乗用の魔獣の姿しか見えない。

強盗の可能性もある。

戸を叩く音は様子を窺っている今も続いている。焦れてきているのか、戸を叩く強さと速さが増してきており、もはや、ドドドドドドツという、戸を叩く音とは思えない音がしている。明かりが漏れている時点で、居留守は使えない。

(……これ以上、様子見しても仕方ないか)

何者かは分からないが、居留守が使えない以上、どうやら出るより他ないようだ。半ば諦めの境地に達した篤美は、とりあえず近くにあった布の裁断に使ったナイフを手に取り、逆手で持つ。ナイフを持った手を軽く背後に隠し、そろそろと戸に近づく。

ごくつと一度生唾を飲んで、戸の外にいる人間に声をかける。

「……どちら様でしょう？」

すると、割かし最近聞いたことがあるような声で答えが返ってきた。

「ディリア騎士団の者だ」

（騎士団？騎士団がこんな時間に一体何の用だ？）

騎士団が会いに来るようなことは、何も思い浮かばない。

そもそも騎士団と関わったのは、トルコだかバルトだかいう、あの若い青年を気まぐれに介抱した時だけだ。正直、すでに名前もうる覚えであり、今さらお礼をこんな時間に言いに来たというわけではないだろう。

怪訝に思いながら、軋む音を立てる戸をそろそろと開ける。

外を覗き込むと、何時ぞや話した、熊二号もといディリア騎士団副団長が立っていた。

六話（後書き）

異世界服飾事情をちらりと。

早く騎士団以外の絡みが書きたいです。

なかなか話が進まない……orz

七話（前書き）

PV60000アクセス、ユニーク100000アクセスありがとう

ございます！！

話が中々進みませんが、これから進展していきます！（・・・多分）

七話

「何だ、ここはあなたの家か」

少しだけ戸を開けて目があつた瞬間、意外なものを見たかのように熊二号が目を見開いた。

(……………どういう意味だ、熊め)

常識的にあり得ない時間な上に、誰の家とも知らずに来やがったのか。

「何だとは御挨拶ですね、副団長さん。こんな時間に訪問されるほど、貴方と親しくさせていただいている記憶はないのですけれど」

というより、会うのは二度目だ。

真夜中に勝手に来て意外そうな顔をされても、正直こちらとしてはどうリアクションをとったらいいか、判断に迷うところである。

戸惑ってオロオロしてみるのも有かもしれないが、生憎そんな可愛い性格をしているわけではない。

ほんのちよっぴり皮肉を交えて、笑顔でこたえと(目はもちろん笑ってない)、少しだけバツの悪そうな顔をした。

「悪い。あなたの家とは知らなかった。確かアーチャだったな。実

は怪我人がいてな、少し部屋を借りたいんだが……」

「怪我人？」

そんなもの何処にいるのか？と、いぶかしみつつ熊二号を観察すると熊二号が小脇に何か抱えていることに気がついた。子供くらいの大きさの、布切れに包まれた何か。

「もしかして、怪我人ってそれですか？」

熊二号が抱えているものを指さす。

「ああ、大分弱っている」

だったらもう少し抱え方を考えろ、と言いたくなった。

熊二号が小脇に抱えていた何かが怪我人ならば、大きさに間違いなく子供だろう。

なんでこんな時間にこんな街から離れた場所で怪我した子供を抱えているのか、とか大いに突っ込みたかったが、それ以上に熊二号に抱えられた子供（仮）が心配である。

顔を覗かせる程度に開いていた戸を大きく開け、熊二号が家の中に入れるようにスペースを開ける。

「ベッドに寝かせて下さい。とりあえず水を用意します」

「悪いな。邪魔をする」

熊二号が家に入ったことを確認して、戸を閉める。そのまま風呂場に向かった。

部屋に入れば、すぐにベッドが見えるほど狭い家だから、わざわざ案内せずとも勝手にやるだろうと判断してのことだ。

風呂場に置いてあった水桶を手に取り、台所にある水瓶から水を移した。

途中、洗ったばかりの清潔な布を手に取り、ベッドに向かう。

怪我がどの程度かは知らないが、生憎我が家には傷の手当てをするための道具など無い。普段は怪我をしても精々軽い擦り傷くらいだから、水できれいに洗ってそのまま自然治癒に任せていたからだ。ベッドの方に視線をやれば、思った通り熊二号が布の塊をベッドに横たえようとする姿が目映った。

「水と布です。生憎ここではこんなものしか用意できないんですが……」

「ああ、助かる。この後、魔術師が来るから大丈夫だ。傷口だけ洗わせてくれ」

「分かりました」

熊二号がベッドに横たえた布の塊から布を捲りあげると、中身が現われた。

熊二号の後ろから覗き込むと、7、8歳くらいの、顔だけでは男の子か女の子か分からない中性的な顔立ちの子供が現われた。

その顔は泥で汚れ、所々痛々しい擦過傷が見える。大きな怪我は見当たらないが、衰弱しているのか、青白い顔で弱弱しい呼吸をしている。

布を剥いだ熊二号は、でかい凶体に似合わないほど優しく丁寧な動作で、泥で汚れた所を拭き、傷口を洗い流していく。

「……この子は？」

「詳しくは後で話す」

「手伝いは？」

「大丈夫だ」

手伝うことはないらしいが、よっぽど汚れているのか、二、三度拭いた布を洗っただけで、みるみるうちに水桶の水が汚れていった。

「水を替えてきます」

「ああ、ついでにあれば乾いた布もくれ」

「分かりました」

こちらを見ることなく返事した熊二号をそのままに、水桶を持って

再び台所に戻る。

(鍋かなんかに水をストックしておくか……)

この様子だと今替えた水もすぐに汚れてしまうだろう。

傷口を拭うのにそれはよろしくない。

汚れた水を棄て、きれいな水を汲み直した水桶をベッド脇のテーブルに置くと、すぐに台所に引き返し鍋に水を汲む。

布も何枚かまとめて手に取る。

「水と新しい布です。替えて下さい」

「おう」

新しい布を手渡し、黙々と作業する熊二号の手元を観察する。布を新しく替えるたびに子供はきれいになっていった。

水を新たに汲み直すころには、汚れはきれいに落ち、露わになったいくつかもある傷口の赤が痛々しく目に映った。

作業が終わるのを見計らい、コップ二つに水を注ぎベッドに運ぶ。

1つは怪我をした子供用、もう1つは熊二号用である。

布に包まれていた子供は、汚れを拭き取る過程で男の子であると分かった。今は汚れた布も取り去り、裸の状態でベッドに横たわっている。

相も変わらず弱弱しい呼吸をしており、時折ヒューヒューと掠れた呼吸音がする。

いくらなんでも、魔術師が来るまで裸のままは気の毒である。

女ものを男の子に着せるのは何やら申し訳ない気がするが、この場合は仕方がない。

ごそごそとチェストもどき（もどきとしか言いようがないちゃっつい作りの収納BOX）を漁り、着せやすそうな長めの釦シャツと短パンを取り出す。

古着だが、柔らかい綿できており、傷口にも負担は少なくてすむだろう。

無言で熊二号に差し出すと、意図を汲み取ったのか、無言で着せていく。

着せ終えるのを待ち、これまた無言で水の入ったコップを差し出すと、子供の上半身を置きあがらせ片腕で支え、器用に水を飲ませる。半分程飲ませると、少しだけ子供の呼吸が穏やかになった。

なんとなく、ホツとした空気が流れた。

そのまま上掛けをかけてやり、子供を寝かせる。

一仕事終えたように長く息をつく熊二号にも水の入ったコップを差し出してやる。

「悪いな」

「いいえ」

我が家には椅子が一脚しかない。その唯一の椅子には熊二号が腰かけていたため、行儀悪いがテーブルの上に腰かける。喉が渴いていたのか、熊二号は一息に水を飲み干した。

「で、この子供はどうしたんですか？貴方も含めて、何故こんな時間こんな街はずれに？」

「ああ、話せばそこそ長くなるんだが……」

「魔術師さんはまだ来ないし、どうせ今夜はこの子を動かさない方がいいでしょ。時間なら夜が明けるまでたっぷりありますし、聞かせてもらいましょうか」

真夜中に押し掛けられた拳句、ベッドまで占領されてしまったのだ。例え面倒事であろうと、ここまできたら理由を聞かねば、なんとなくおさまらない気がした。

おそらく深夜の妙なテンションがなせる技だろうが、面倒事は全力で避けようとする篤美にしては珍しく、事情を聞き、それ次第によつては関わる気でいた。

子供がこんなにもボロボロに弱っているのが見ていられたかっただけでもある。

(正義感なんて立派なものじゃないけど、子供がこんな形なりになつてるのは見過ごせないからねえ……)

さっさと話せと目で圧力をかけると、なんとなく面倒そうな顔をしていた熊二号は諦めたかのように、大きく溜息を吐いた。

八話

ぬうう……と低く唸りながら、熊二号が頭をガシガシ掻いている。話す気にはなつたらしいが、どう説明するかを考えているのか、単に面倒くさいからか、唸るばかりでなかなか話しださない。ついさつき、諦めたように溜息をついて話し始める空気になったのに、往生際悪く、あー、だの、むー、だの唸るばかりである。往生際の悪い男だ。

(人語が話せなくなつて、いよいよ熊になつたか……)

などと失礼なことを考えていると、不穏な気配を感じたのか、熊二号がこちらを見た。

なんとなく誤魔化すように営業スマイルを浮かべる。働いている飯屋に来る酔っ払いどもには評判がいいのだが、失礼なことに熊二号はいぶかしげにこちらを見たあと、肺の空気を全て絞り出すような溜息を吐いた。

溜息ばかり吐く男だ。

元々、あまり気が長い方でもないため、ここまで焦らされると、なんだか少々面倒くさくなってきた。

「回りくどいのは好きじゃないから、端的に言う」

「はい」

(やれやれ……焦らすねえ。そんな大層な理由があんのかい……)

説明はされていないが、大方この子供は家出をした貴族の子供だろう。

この子供は今はいちこち傷だらけだが、農民や街の子供にしては身体がきれいすぎる。特に手だ。農作業や家の手伝いをしたことがないであろう、白魚の様な手をしている。(男の子にこの表現はどうかと思うが)

やんごとなき御身分の貴族様のお子様が出た揚句、家の人間が子供がいないことに気づいて騎士団に捜索を依頼したとかそんなところではないだろうか。

方角的に森の方から来たから、おそらく森に行って怪我をしたと思われる。

熊二号が話を流すのも、本当に説明するのが面倒くさいか、貴族の身分が高すぎて、アーチャのような一般庶民には話しづらいか、そんな感じだろう。

「実はな……」

「実は……?」

熊二号の真剣な顔に、思わずこちらも居住いが直る。

(一体どこのお偉いさんの息子なんだい?)

野次馬根性がうずうずする。意味のない期待感に少しだけ身体を前にやる。

「実は……このガキはうちの団長だ」

「……は？」

「だから、うちの団長。現国王陛下の息子にして、ディリア騎士団団長にして、チュルガ領主であらせられるヒュルト・マクゴナル・トゥーラ様だ」

しばし呆ける篤美。

(……ちよつと待て。今この熊なんて言った？王の息子？騎士団団長？領主？え、いや……は！？この子が！？)

「え……っと、ちょっと待って下さい……今、なんておっしやいました？」

「こちらの方は、騎士団長兼チユルガ領主のヒュルト・マクゴナル・トウーラ様だ」

どうやら、聞き間違いではないらしい。

私のベッドで眠るこの子供は、現王の息子であり、騎士団長であり、このチユルガの領主様なのだそうだ。

この街に来て約一月。

入居の手続きなどは役場みたいな所でしてもらったので、騎士団長は勿論のこと領主にだって会う機会がなかった。

そのため、顔も名前も知らなかった。というか、大方領主だの騎士団長だのって役職は老年一步手前のオジサンがしているものだと思っ込んでいた。

思わぬカルチャーショックに身体が強張る。

まじまじと熊二号のでかい体の向こうにいる弱弱しい呼吸で眠る子供を見る。傷だらけの顔は痛々しいが、造作は整っており、中世的な可愛らしい顔立ちをしている。今は少々薄汚れているが、おそらくきれいにしたら夕陽を思わせるであろう赤毛の、未だあどけない子供だ。

(こんな子供がそんな大層な役職についてる、だと……?)

「あ、の……私、恥ずかしながら物知らずなんですけど。……騎士団長とか領主とかって、王族とはいえ、こんな子供がなれるものなんでしょうか……？」

「普通に考えてありえんだろう。特にこのチュルガは国の防衛の要の一つだ」

「……ですよねえ。じゃあ、この子は？」

「……今はこんな形なりだが、今年で28歳になる立派な成人男子だ」

「……はあ？」

あまりに突飛な話に驚きすぎて、ろくな反応ができない。

今まで知らなかったし、マルコ爺も言っただが、この世界の人間は若返ることができるのか!?(だとしたら何て羨ましい!!)(

「……この国じゃ若返ったりできるんですか？」

「凄腕の魔術師ならな」

(……マジかよ、できるんかい……ファンタジー……今めっちゃファンタジー。こっちに召喚されたとき以来のファンタジー到来……)

思わず遠い目になる。確かにこの世界は魔法があるし、実際篤美もその恩恵に預かっている。

例えば、台所の貯蔵庫は魔石とかいう魔力を封じ込めた石を使った冷却装置が置いてある。元の世界の冷蔵庫のようなものだ。原理や仕組みは詳しく知らない。しかし冷蔵庫だって、原理だの仕組みだの知らない。そんなこと知らなくなっただけで使い方さえ知っていれば、使えるものだ。

そういう意味じゃ、日々の生活に溢れた魔術を使った品々は電気製品と何ら変わりがない。

しかし、元の世界にあったフィクションの中に描かれているような魔法にお目にかかるなんて、召喚されたときを除けば、この2年間一度としてなかった。

「団長様はご自分でこのお姿に？成人男性の方がなにかと便利だと思っんですけど……」

「……自分の意思でこんな姿になったんじゃない」

熊二号が苦虫を噛み潰したかのような苦り切った顔で唸った。

本当にどうでもいいことだが、今の熊二号の顔は、部屋の薄暗さも相俟って小さい子供が見たら本気で泣き叫びそうなくらい怖い。

「嵌められたんだよ。クソ忌々しいイカレ魔術師に」

（嵌められた……？）

どういうことかと、篤美がいぶかしげに眉根に皺をよせ、（野次馬根性で）さらに追求しようと身を乗り出し、声を発しようとしたまさにその瞬間。

玄関の戸がトントントンと控えめに叩かれた。

（誰だ、この盛り上がってきた時に……！主に私のテンションがだ

けど！)

思わず舌打ちをしそうになるのを堪え、座っていたテーブルから立ちあがり、外に向けて声をかける。

「どちら様ですか？」

「デイリア騎士団の者です。こちらのお宅にイザーク副団長は居られるでしょうか？」

若い男の声が応えた。

確認するように熊二号に顔を向けると、大きく頷いた。どうやら本物の騎士団関係者らしい。多分、先ほど言っていた子供もとい団長様の治療に来た魔術師だろう。

内心、いいところを邪魔しやがってと、まだ見ぬ騎士団関係者達に悪態をつきつつ、玄関のカギを解錠し、戸を開ける。そこには、以前篤美が街で介抱したバルト・クエーツという男と、初めて見る男が二人立っていた。

「あれっ？ここ、あなたのお家なんですか？」

「君んとこの副団長さんも同じ反応をしたよ」

意外な顔を見たと言わんばかりに目をパチパチさせるバルト・クエーツに、クスクス笑いながら応える。

熊二号と同じようなりアクションがなんだか可笑しく思えたからだ。

「二人は中だよ、入りな。ただし、見ての通り狭い家だからね」

外にいた三人の男を家の中に迎え入れる。

(やれやれ……望んでもいないのに千客万来だね)

三人の成人男性、しかも騎士を室内に通すと、一気に部屋の中が狭苦しくなった。

バルト・クエーツを除けば、他の二人はがたいがいしいし、熊二号に至っては言わんや、である。

バルト・クエーツだけが熊二号の側に行き、あとの二人はテーブルを挟んで壁際に立った。一人は外を警戒しているのか、窓から外を見ている。もう一人は腕を組んで壁に凭れかかった。

なんとなく近寄りがたい空気を感じ、篤美は玄関の戸に凭れかかっ

て、彼らの様子を見ていることにした。

「遅いぞ」

「仕方ありませんよ。これでも急いで来たんですから。大変だったんですよ、探索魔法かけた後あそこの魔力痕跡消すの」

「そうかよ。傷は洗ってある。まだ意識は戻らない。早速始めてくれ」

「分かりました」

治療に来る魔術師とは、バルト・クエーツのことだったらしい。なるほど。騎士にしてはひ弱に見えたからてつきり（あるのかわらないが）事務とか、文官かと思っていたのだが、魔術師だったのか。熊二号が椅子から立ち上がり、彼に場所を譲る。

バルト・クエーツは、椅子をテーブルのところ押しやり、スペースを作ると子供、団長の枕もとに立った。

子供は、身体をきれいに清め水を飲ませたからか、少しは呼吸がマシにはなったようだが、相も変わらず真っ青な顔色で弱弱しく呼吸をしている。

魔術師が一度大きく深呼吸した。

「始めます」

これから魔術による治療が始まる。

九話

唯一の光源であるカンテラに照らされた薄暗い部屋は、バルト・クエーツの低い小さい声だけが響く。

篤美には上手く聞き取ることができないその言語を真剣な顔であったかも唄うように唱える。

横になる子供の額に手をかざし、その手は淡く蒼い光に包まれている。

こんなことを思う場合ではないかもしれないが、……美しいと思った。

(これが魔術か……)

非現実的なその光景は、淡い蒼に照らされたバルト・クエーツの整った顔も相俟って、篤美の目にはまるで美しい宗教画のような神秘的なものに思えた。

どれほどの時間が経ったかは分からない。

短かったようにも長かったようにも思える。

息すらも潜めて食い入るように見つめていると、バルトが大きく息を吐き、その手を子供の額から離れた。

薄暗く篤美の位置からは確認しづらいが、青白い顔で弱弱しく呼吸をしていた子供は、頬に赤みを取り戻し呼吸も正常になって今はただ眠っているようだ。

「……終わりました」

「御苦労。で、どうだ？」

「ひどく衰弱していることを除けば、あとは擦り傷と軽い打撲だけの健康体です。魔力循環も身体構造も異常はありません。ただ身体が退行したというだけのようです」

「いろいろツツコミたいところだが……命に別条はないんだな？」

「はい。もちろん身体が子供になったことで体力、魔力共にそれ相応になっていきますが。この衰弱した状態はおそらく急激に身体が退行したことによるものようです。2、3日安静にしていればすぐに元気になりますよ」

「そうか……団長はどうやったら元の身体に戻る？」

「……見たことがない魔術が使われているようですから、現段階ではなんとも……」

「……張本人を締め上げるしかないってことか……」

「それが一番速くて確実かと……」

熊二号が大きく舌打ちをして自身の頭をガリガリと強く搔く。
元々静かだった室内に重苦しさが広がる。
ベッドに横たわる子供の横で、大の大人が4人、まるで通夜の様な沈痛さで黙りこくる。
あまりの重苦しさに息が詰まりそうだ。

篤美は溜息を小さく吐くと、凭れかかっていた玄関から離れ、障害物（主にガタイのいい客人達）をよけつつベッドに近寄る。
客人達からの視線を感じたが、無言でヘッドボードに置いてあった煙草と着火具、灰皿を取ると再び玄関に向かう。

「……………何処へ？」

壁際に凭れかかっていた方の騎士が声をかけてきた。
他の騎士達も無言を此方に視線をよこす。

「……………一服」

煙草の箱を持った手をヒラヒラさせながら玄関を開け外に出る。
とたんに生ぬるい風を頬を撫で、篤美は重苦しさに詰めていた息を静かに大きく吐き出した。

灰皿を足元に置き、玄関に凭れかかって煙草を口に銜える。
着火具で火をつけると、ジジツという小さな燃える音と共に暗闇の中に小さな煙草の明かりができた。

どこを見るともなく視線を前方に固定したまま、胸一杯に紫煙を吸い込む。

煙草を吸ったとき特有の酩酊感に一瞬だけ目を閉じた。

（やれやれ……ノリとテンションと成り行きだけで関わっちまったけど……）

「王族……か……」

憎くて憎くて仕方がない王族が自分の家の自分のベッドに寝ている。現実味がないが、事実だ。

まさかこんな形で王族に関わることになるとは……予想だにできなかった。

叶うならば何度皆殺しにしてやろうと思っただろう。

初代王妃が異世界人だったという、理解しがたい自分本位にも程がある下らない理由で勝手に召喚して、これまた身勝手な理由で右も左も分からない自分を放り出した王族。

自分には自分の世界が、自分の暮しが、自分の家族がいた。それは自分にとって、確かに生きてきた蓄積であり証拠であり全てだ。それを一瞬で奪われた。傲慢なるこの国の王族によって。自分だけではない。

これまで召喚されてきた女達も、自分の後に召喚された少女も。

昏い昏い憎しみの焔がゆらりと立ち昇る。

王族は憎かれど、否、憎いからこそ、何が何でも一生関わる気はなかった。

それがなんの因果か我が家にいる。しかも酷く弱った子供の状態でまるで暴風雨のように頭の中が乱れる。

相手は今の子供だ

それが何だ？王族じゃないか

あの場にはいなかった奴かもしれない

関係ない。王族というだけで許し難い

アレを殺して何の意味がある？

そんなこと知るか。殺した後考えればいい。

殺したくはないのか？復讐したくはないのか？

……殺したい。殺してやりたい。私が被った全ての苦しみを、悲しみを、痛みを与えてやりたい……

憎い。許せない。私の全てを奪った奴らを。憎くて憎くて憎くて憎くて憎くて憎くて憎くて憎くて憎くて憎くて憎くて憎くて憎くて憎くて憎……

足に感じた一瞬の熱と痛みにもハッと昏い思考から引きずり戻される。無意識のうち力を入れすぎたせいで煙草が途中から折れて、火のついた方が室内用のサンダルを履いた素足の上に落ちたようだ。

（駄目だ……落ち着け）

火がついたままの落ちた煙草の火を踏み消し灰皿に落とすと、新たに煙草を取り出し火をつける。

現実問題として、今ここで何かしようとしたところで騎士が3人に魔術師までいる。

とてもじゃないが、あの子供を殺せるはずがない。

殺したところで元の世界に戻るはずもない。

当事者でもないあの子供を殺したとしても、この胸に巣食う消えることのない憎しみが晴れようはずもない。

（私は無力で臆病だ……）

元の世界に戻ることも、復讐することもできない。

その努力すらもしていない。

ただ流されて惰性で生きて、そしてこの憎たらしい世界で一人老いて死ぬのだろう。

自嘲に煙草を銜えた唇が歪む。

（復讐したところで何も変わりはない。ただ疲れるだけだ……）

諦めてしまうのが一番楽だ。

是までだってそうしてきた。

何も考えず、目先の楽しいことだけ考えて、
適当に働いて、
適当に生きて……

それで十分じゃないか。

何か行動を起こすには、歳を取り過ぎたのだから……

言いようもない無力感と疲労感、寂寥感を誤魔化すように、大きく紫煙を吸い込んだ。

九話（後書き）

更新に随分間が空いてしまい申し訳ないです。

篤美はガツと一瞬盛り上がり、速攻で盛り下がるタイプです。

十話

二本目の煙草を吸い終わり、家の中に戻ると、相も変わらず重苦しい空気が場を支配していた。

(やれやれ……)

煙草などを玄關脇のちよつとした棚の上に置き、台所に向かう。ケトルに水をそそぎ火にかけると、ゴソゴソと戸棚を漁くる。

(客が来ること前提で食器を買ってないしな……)

あまり大きくない戸棚中を探しまわって見つけたのは、陶器製のマグカップが二つと木彫りのこ洒落たカップが三つ。

木彫りのカップはここに来る前の街でうっかり一目惚れして衝動買いしてしまったものだ。

花をモチーフにした幾何学模様が彫られてあり、三つの連作のものだ。

戸棚の肥しになるだけかと思っていたが、思わぬところで日の目を見ることになったようだ。

普段は水かダル酒しか飲まないため、若干埃被ったお茶葉の入った缶を棚から取り出す。

ムク茶というこの地方独特のお茶だ。初めてこの街に来た時に雑貨屋の女将さんに勧められて買ってはみたものの、一度も飲んだことがない代物である。

淹れ方は日本の緑茶とそう変わらないらしいが、どの程度茶葉を入

ればいいのか、いまいち分からない。

これまた埃被っていたティーポットを軽く水で洗って布巾で水気を拭き取ると、茶葉を入れる。

分量は適当だ。

試しに飲んでみて薄ければ茶葉を足して蒸らしなおせばいいし、濃すぎればお湯で割ればいいだろう。

なにせよ飲めないものにはなるまい……多分。

使ってなかったカップも水で洗い、拭き終わる頃に丁度お湯が沸き上がった。

緑茶や紅茶なんかは確か淹れる適温があったと思うが、そんなもの覚えていないし、何の参考になるとも思えない。

とりあえず飲めればいいのだから、何も気にせず沸騰したお湯をポットに注ぎ込んだ。

蓋をしてしばし待つ。

ジャスミンティーのような甘い、それでいて爽やかな花のような香りが鼻孔を擽る。

もういいか、と思い、試しに自分のカップに少しだけ注いでみる。

飲んでみると、茶葉が多かったか、蒸らしが長かったか、少しだけ苦味があったが、爽やかな甘い香りが鼻孔を通り抜け、中々に自分好みのお茶である。

女将さんには随分といいものを教えてもらっていたんだな、と本当に今さらながら有り難く思う。

とりあえず問題ないことが分かったところで、五つのカップにムク茶を注いでいく。

生憎お盆なんてものはないから、一つずつ片手にカップを持って重苦しい空間に戻る。

功労者であるバルト・クエーツと、この中で一番地位が高いであるう（寝ている団長殿は除く）熊二号に近づき手渡す。

「……………」

「……悪い。いただきます」

「ありがとうございます」

「いえ。お二人には今から持ってきます」

名前も知らない残りの二人の騎士に声をかけ、台所に戻るうとする
と、窓の外を見ていた方の騎士が此方へ近寄ってきた。

「手伝います」

「……………」

手伝ってもらう程のことではないが、一人だと二往復しなければな
らないことを考えたら、自分らの分は自分で持って行ってもらった
方が楽だろう。

彼を先導する形で台所に向かう。炊事場の上に置いていた湯気が立
ち昇るカップを二つ手渡す。

「……………」

「ありがとうございます」

騎士がペコリと小さく頭を下げた。
褪せたような色味の、短髪とも長髪ともいえない微妙な長さの金髪を後ろで結んでおり、それが尻尾のように揺れるのが見えた。
20代後半くらいだろうか。細い眉とややつり上がった涼しい目元、通った鼻筋に薄い唇。全体的に整っているが、何となく冷たい印象を受ける顔立ちだ。
典型的な狐顔ともいえる。

(尻尾といい、まんま狐だな)

安直に狐君と名付け、狐君の後を追うように自分のカップを持って騎士達のいる部屋に戻る。

ムク茶の甘い爽やかな香りが広がる空間は、先ほどまでの重苦しさがかなり軽減していた。

もしかしたらムク茶は、ジャスミンティーのようにリラックス効果があるお茶なのかもしれない。

皆無言でムク茶を啜っていたため、再び玄関に凭れかかり、篤美も熱いムク茶を啜る。

ふと視線を上げると、壁に凭れかかった騎士と目があった。

そのまま無言で頭を下げられたため、此方も目礼を返す。

はああああ……と熊二号が肺の空気全てを吐きだすような溜息をついたため、何となく全員が其方に目を向ける。

「とりあえず……だ。このままじゃ何も進まん。ちと今後どうする

かを決めよう」

「外に出てた方がいいなら出るときですけど」

機密的なこともあろうと思っての発言だったが、熊二号は緩く頭を横に振った。

「いや、アンタもいてくれ。アンタにも関係があることだ」

何となく眉根に皺が寄る。

多分間違いない厄介事に巻き込まれた。……全力で今更だが。

「団長と交戦していた魔術師の話は団長が目覚めてからすればいいとして……だ、この姿の団長を他の人間に見られる訳にはいかない」

確かに、仮にも王族兼領主兼騎士団長の彼がまさか子供に変えられちゃいましたじゃ、外聞も甚だ悪かろう。

そして熊二号達にはこちらの方が問題かもしれないが、やりあった魔術師がまだ生きているのならば再び狙ってくる可能性がある。

この子の実力なんて知りもしないし正直興味も対してないが、騎士としての実力を存分に発揮できる大人の姿ならともかく、こんな細っこいひ弱な子供の状態ならそれこそ私にだって殺せそうだし。ならば隠しておくのがセオリーだろう。

なんてことを他人事のように考える。実際に他人事であるが。

しかしながら、何やらものすごく嫌な予感がする。十中八九当たるであろう嫌な予感がビシバシする。話の流れから言って間違いない。怖いくらい真剣な顔で熊二号が口を開いた。

「あなた、団長をこのまま匿ってくれないか？」

……やっぱりだ……畜生め。

予想と違わぬ発言に思いつきり眉間に皺が寄る。予想していたこととはいえ、内心、限りなく900hPaに近い台風圏内ばりに荒れ狂っている。様々な思いが篤美の中で声高に叫び声を上げ、何が何だか分からなくなるほどの衝動に一瞬だけ目の前が暗くなる。

(夜中にいきなり王族連れて押し掛けてきたと思ったら、こんどは厄介事の種を匿えだ?……ふざけるよ)

ヒステリックに喚き始めなかった自分を褒めてほしい位だ。

先ほど外で一服して沈めたつもり of 昏い衝動が再び急速に湧きあがる。

極力冷静になろうと、意識して息を細く吐き出す。

眉間の皺はものすごいことになってそうだが、この際そこは諦める。

「……本気ですか?」

睨みつけるように熊二号に視線を向ける。地を這うような低音になってしまったのは致し方がない。

視線を向けられた熊二号の後ろにいたバルト・クエーツがビクツと身体を揺らしたが、当の熊二号は平然と篤美と目を合わせる。

「ああ」

「何故、私が?」

「この場にいる人間以外、このことを知らんからな。まさか、この姿で皆に連れ帰るわけにもいかん」

「それはそっちの都合でしょうが」

「そうだな。アンタには悪いと思うが協力してもらおう」

「協力？強制の間違いじゃないんですか？どうせ、断らせるつもりもないのでしょうか？」

熊二号が目を細める。激高しそうなのを必死に抑えている此方とは対照的に、ひどく冷静そうなのが腹立たしいことこの上ない。被っていた猫がドンドン剥がれていく。

「まあな」

「……もし私が断ったら？」

「アンタは断らないよ」

「……何を根拠に？」

「勘」

「は？ふざけんのも大概にしてくださいよ。アンタ今どんだけ理不尽なこと言ってるか分かってんの？」

「別にふざけてねえよ」

「ふざけてるだろ。夜中に女の一人暮らしの家に押しかけて来たと思ったら、この怪我した子供が王族だ？しかも匿えだ？悪いけど、私にはタチの悪い冗談にしか聞こえないね」

「だが事実だ。それにこれはアンタじゃないと頼めない」

「だから何故そこに善良な一庶民を巻き込む必要がある」

「巻き込むたあ、人聞きが悪いな」

「巻き込む以外に言いようがないだろう。厄介事の臭いがこんなにブンブンしてるのに」

「礼はちゃんとするぞ」

「そういう問題じゃない。私は厄介事になんざ関わりたくないんだよ。しかも王族とか、一級品の厄介事じゃない」

「その分、報酬ははずむぞ」

「だからそういう問題じゃない。王族なんかと関わり合いになんかなりたくないって言ってんの」

「何故？」

「第一に私は元々この国の民じゃないから王家に忠誠心なんざ持っていない。第二にこのガキはこの状況からみりゃ、どうあつたって命を狙われているか、あるいはそれに準ずる状況だろうが。ヘタに関わって私の命まで危険にさらされるとか冗談じゃない」

「仮にも王家の人間をガキ呼ばわりするか、普通？」

熊二号は呆れたような顔になった。窓際の騎士の方からチクチク痛

い視線を感じる。

「論点はそこじゃない」

「アンタに頼む理由は二つ。一つはこの場に居合わせたから。もう一つはアンタが頭の悪い女じゃなさそうだからだ」

「ハッ……そいつはどうも！嬉しくないからこの子連れてとっとと帰ってこないかい？出口は此処だよ」

寄りかかっていた玄関の扉から少し身体を離して脇により、屋外に向けて顎をしゃくる。

「だからそれはできないんだっつもの。あーもう、面倒臭えなあ。アンタ多分頭は悪くないから分かってんだろ？いくら押し問答したところで、拒否権なんざアンタにないの」

いい加減面倒になったか、熊二号ガリガリと頭を掻きながら溜息を吐きやがった。

溜息吐きてえのはこっちだ糞熊が。

「……………」

「こっちだって一般人を巻き込みたくねえんだよ。だが今の状況じゃそつも言ってもらえん。背に腹は代えられねえんだよ」

「……そのガキを匿うと見せかけて、そいつを狙う奴らに売り渡すかもよ？それか、それだけ小綺麗な顔してんだ。売春宿にでも売っばらうたらいい額になるんだらうね」

「アンタは、んなこたあしねえよ」

「……何故言いきれる？」

「勘」

「……またそれかい」

舌打ちをしつつ、玄関脇の棚に置いた煙草を手にとり、一本銜えて火をつける。

子供がいる所では吸わない主義だが、この際仕方がない。

このままだと、ヒステリーを起こしかねない。糞つたれな熊二号が言うことが本当なら、自分のベットに寝ているのは子供ではなく28歳の成人男性だ。

「この手の俺の勘は外れたことがねえんだよ」

「ああ、そうかい!!……つくそ」

舌打ちと共に吐き出しながらガシガシと頭を搔き毟る。

大きな溜息と共に紫煙を吐きだす。思いっきり熊二号の方に向けてやったのは些細な嫌がらせだ。

もつとも熊二号は平然としたままで、後ろにいたバルト・クエーツが少し嫌そうな顔をして煙を払うように手をパタパタさせた。

「……何故、そこまでしてこの子供を隠す必要がある？」

「お、やっと匿ってくれる気になったか」

「まだやるとは言っていない」

「往生際の悪い女だなあ、おい」

「うるせえよ」

「口も悪いしな。アンタそれが素だろ」

「だから、うるせえよ。話をそらすな。私の素とか関係ねえだろ。とつとと答えるや」

煙草を斜に銜えながら睨みつける。

「どこのチンピラだよ」

こつちが醸し出す陰険な空気をチラリとも読まずに、愉快そうに器用に右眉と左の口角を上げる熊二号。

……ものすごく腹立たい。

「状況なんかの詳しい話は団長が起きてからだ。とりあえず、アンタは引き受けてくれるってことでいいんだろっ?」

「……誰が引き受けると言った……」

「いい加減諦めろよ。どうやったってアンタは断れない」

「……糞つたれが……」

握りしめた拳を壁に思いっきり叩きつける。
静かな室内にガンっという音が響く。

そのまま寄りかかっていた身体を離し、台所に向かう。
その背に熊二号から声がかかる。

「おい、何処行くんだ?」

「……酒をとつてくるだけだ……」

唸るように応え、そのまま振り向かず台所に行き、ダビ酒の瓶を取り出し、そのままその場で呷る。

(飲まずにやっつけられるか、畜生め!！)

甚だ不本意極まりないうえに信じがたいが、王族のガキの面倒をみ

なければならなくなったようだ。

(何がどうしてこんなことになった……!!)

やり場のない憤りに震える拳を俯いた額にそえる。

この世界に連れて来られて二年。やっと穏やかな暮らしができると思っただのに。

叫び出すことのできない、もはや言い表しようがない思いを無理やり酒と共に呑み込んだ。

この世界はいつだって理不尽だ。

十話（後書き）

思ったより進みませんね（汗）
自分の文章表現力の拙さにガッカリです。

十一話（前書き）

今回は少し短いです。

十一話

結局、日が昇っても子供が目覚めることはなかった。

篤美はあれから騎士達のいる場へは戻らず、そのまま台所で時折酒を呷ったり煙草を吸ったりしながら朝を迎えた。

初夏ではあるが、険しい山の麓にあるチュルガの朝は秋口並みに冷える。冷たい石の床の上にずっと座っていたため、身体は冷えていりし、腰もお尻も痛む。

何もなければ、風呂に入って芯から温まり、仕事までの短い時間を睡眠にあてるところだが、そうもいくまい。

騎士達もあのまま、一つしかない狭い部屋で過ごしたようだ。

篤美が台所に籠ってから、割と長い時間、ぼそぼそと低い話し声が聞こえていたが、朝日が昇るころにはそれもなくなり、家の中は嘗て無いほどの人口密度にも関わらず沈黙が支配していた。

寝不足と急激なストレスによる頭痛でひどく頭も身体も重いが、小さく溜め息を吐いて立ち上がる。くらりと眩暈がして身体がふらつくが、壁に寄りかかってやり過ごす。

気が進まないが今日は仕事を休まねばなるまい。不本意ながらあの子供を匿うことになった以上、事情を聞いたうえでこれからのことを話し合う必要がある。

(…ガディさんの店に行つて、帰りに朝市で色々仕入れなきゃな…)

戸棚からコップを取り出して冷たい水を汲むと、一息で飲み干した。冷たい水が食道を通り胃に落ちる感覚に、ふるりと小さく身を揺する。

コップをそのまま台所に置き、騎士達のいる部屋を横切って風呂場に向かう。小さな脱衣場にある棚からタオルを一枚手に取り、洗面台で冷たい水で顔を洗う。ぼんやりと重たかった頭が少しだけクリアになった。壁に掛けてあるさほど大きくもない鏡を見ると、ひどく疲れた顔をした中年の女が写っていた。

部屋にいた騎士達もやはり全員一晩中起きていたようだ。

徹夜明けのどんよりとした澀んだ空気の中、子供の規則正しい寝息だけが聞こえる。

熊二号に声をかけ店に休みをもらいに行く旨を伝え、チエストから適当に服を取り出し風呂場で着替えると、そのまま風呂場にある裏口から家を出た。

空を見上げると眩しい程の青が広がっていた。

ガデイの店が開くのは昼からだ、朝市でその日の料理の材料を仕入れるため、この早朝とも言っていい時間帯でもおそらく誰か店に

いるだろう。

この街に来てさほど経っていない、ろくに知り合いもないような余所者の独り身の女が、いきなり子供を預かることになった理由を適当に考えながら店へと歩みを進めた。

自宅に戻ったのは、昼近くになってからだった。

店に行く途中で上手いこと朝市帰りのガディを捕まえることができ、そのまま一緒に店に入った。

歩きながら考えたでつち上げの理由はさほど違和感なく受け入れられ、今日1日どころか、向こう3日間の休みがもらえた。その間は商家に嫁に行った娘に店を手伝ってもらうらしい。

何度も礼と共に頭を下げ店を出た後は、朝市で騎士達の朝食の分も含めて普段より多めに食料を買い、やや重たい荷物を持ちながら雑貨屋や古着屋を回って必需品を買い込んだ。

持ってきた財布がかなり軽くなり、両手が塞がるほどに荷物が増えたところで帰路についた。

家に帰り着くと、昨夜から居る客人達は一人も欠けることなく居るようだ。彼らが乗ってきたであろう騎獣が呑気にそこら辺の雑草を食べていた。

玄関を開けようにも両手が塞がっているため、足でガンガン扉を蹴りつける。

狐君が扉を開けてくれた。

「…どうも」

「…おかえりなさい。」

ドアノブを握ったまま半身になってスペースを開けてくれる。かさばる荷物のため、横歩きで彼の横を通る。荷物ができるだけ彼に当たらないようにするが、玄関自体が狭いためシツカリ当たっていた。彼の腹を荷物で擦るようにして通り過ぎると、なんとなく溜め息を吐く。

荷物は重いし身体はシンドいしで、さっさと荷物を置いてゆっくり休みたいところだが、我が家であるにも関わらずそんなことできる雰囲気ではない。

ようやく目覚めたのか、ベッドの上で上半身を起こして座る子供の驚いたように目を見開いた顔が見えた。

「…食事を買って来た。話は食べた後でも構わないだろう?」

部屋に唯一あるテーブルに持っていた荷物をドサドサッと置きなが

ら言っ。

どうでもいいが、女がこんだけの荷物を持っているというのに、手
伝わないのは騎士道的に如何なものだ。

「悪いな」

「別に」

熊二号の顔を見ずに荷物をごそごそ選別しながら応える。

買ってきた雑貨と服は袋に入れたまま部屋の隅に置き、朝市で買った
ピロシキみたいな具入りの揚げパンといくつかの果物、瓶入りの
牛乳を二本だけ置いて、それ以外の食料品と買い足した食器類を持
って台所へ向かう。

その背に声変わりもまだな子供らしい声がかかる。

「……………あのっ……………」

「……………話は食った後でだ」

顔だけを其方に向けて応えると、何故か切羽詰まったような青白い
顔が見えた。

気にせず台所に入ると、使ったカップが洗って伏せてあった。
それらを全て持って戻り、牛乳を注ぎ分ける。

揚げパンと果物、牛乳が皆に行き渡ったところで、昨夜からの定位置になりつつある玄関の所に行き、行儀が悪いが立つたまま揚げパンを口にする。揚げたてを買ってきたが、やはりもう生ぬるくなっているうえに表面が油でベトベトし始めている。

大して美味しいものでもないが、機械的に飲み込んでいく。

他の人らもそれぞれが小さく祈りを捧げた後で黙々と食べている。

子供とバルト・クエーツは此方が気になるのか、チラチラ此方を見ながら食べていた。

何か言いたげな顔で此方を見ながら果物を口に行っている子供をスルーして、さつさと自分の分を食べきってしまい、牛乳をチビチビ飲む。

思っていた以上に揚げパンが油っこく重かったため、早くも胃がもたれそうだ。

元々、あっさりしたものを好んで食べていたが、一昔前なら揚げパン一つでこんなに胃がもたれたりしなかった。

(……歳はとりたくないねえ)

これからの憂鬱な話し合いから逃避するかのように、どうでもいいことを考えつつ、遠い目をした。

十二話（前書き）

今回、別人物視点が少しはあります。

十二話

全員があらかた食べ終わったのを確認すると、カップを回収し台所に向かう。

ケトルでお湯を沸かしながらカップを洗い、お茶の用意をする。

買ってきた荷物が入った袋をあさり、中から飾り気のないお盆を取り出して全員分のお茶を置き持ちあげると、一つ溜息を吐いて部屋へと戻る。

(ちよつとした正念場だね、こりゃ)

気合を入れるように、背筋を伸ばして彼らの元に向かった。

部屋に戻りお茶の入ったカップを全員に配る。

配り終えて、もはや定位置と化した玄関に向かおうとすると、一脚しかない椅子を熊二号に無言で勧められた。

ベッドの脇に置かれた椅子に座ると、デカイ男たちに囲まれる形になるため正直座りたくない。友好関係にないむさ苦しい野郎どもに囲まれるなんて、冗談抜きで不快極まりないが、熊二号からは無言の威圧が、子供からは懇願にも似たプレッシャーが押し寄せるため嫌々な空気を醸し出しながら大人しく椅子に座った。

椅子に座ったことで子供と目線を合わせることが容易になった。深みのある緑色のその眼は今は何故か不安に揺れていた。そのことをかすかに訝しく思う。

(この形でも一応いい歳した男だよねえ……気が弱いのか？騎士なのに……)

子供が目を閉じて深く息を吸って吐く。

再び目を開いたときには先ほどまでの揺れた瞳ではなく、どこまでも透明な真剣な眼差しに変わっていた。

「まずは貴女に心よりの感謝と謝罪を致します。貴女が協力してくださらなかったら、今頃私は無事でいられたか分からない。そして……」

「お久しぶりでございます。ご無事でありましたことをお喜び申し上げます。……アチユミ・タニジマ様」

「!?!」

無表情に近かった顔が、スツと完全に無表情になったことが自分でも分かった。

子供は怖い位真摯な瞳で此方を見つめており、凍りついたようにその瞳から目が離せない。

静かな室内に、自分の急速に速くなった心音が響くんじやないか、というほど、忙しく大きく心臓が鼓動を刻む。

何故、この子供が自分の名前を知っている？

寝不足で鈍りがちだった脳みそが、忙しない心音と共に急速に回転し始める。

この世界に来て城を放り出された後は、『アーチャ・タニージャ』としか名乗って来なかった。

些か舌つ足らずな発音とはいえ、篤美の本名を知っている者は片手ほどの人数しかいないはずだ。

(……………こいつ……………)

絞り出すように出した問いかける声は、情けないほどに掠れていた。

「……………アンタ……………あの場にいた人間かつ！」

「……………名乗り遅れまして申し訳ありません。私はヒュルト・マクゴナル・トゥーラ。あの時は騎士団総長という立場で召喚に立ち会っておりまして……………もう一人の異世界よりの花嫁様……………」

(……………やっぱりっ!!！)

異世界よりの花嫁、という言葉が彼の口から零れ落ちた瞬間、室内に驚愕の声があがった。

どういうことだっ!!！

そんなはずがないでしょう!!！

何を言ってるんですか!?!花嫁様は既に婚姻を済まされているじゃないですか!!！

静観の体で話を聞いていた騎士達の驚愕し、混乱する声で、室内は一気に騒がしくなるが、篤美の耳にはそれらが一つとして言葉として入っていなかった。

目の前にあるやや強張った顔を見つめる。確かにあの場に剣を下げた赤毛の男がいたことが、記憶に甦る。

(アレは……………こいつだっ!!！)

「……………確かに……………いたわね、ヒュルト・マクゴナル・トゥーラ。また会う羽目になるとは思わなかったわ」

「……………あの時は……………申し訳ありませんでした。あれからお探ししておりましたが、中々見つけれられず、只ならぬ苦勞をされたことでしょうか。心より……………お詫び申し上げます。」

姿勢を変え、土下座のような形で頭を下げる姿が目映る。ベッドのシーツに額を擦りつけ、かすかに震える掠れた声で謝罪を口にした彼の姿は、まるで断罪を待つかのようであった。

耳鳴りのように響き程の心音が大きくなる。

それにつられるように、呼吸が速くなる。頭が弾けてしまいそうなほど痛む。

まるで走馬灯のように、この世界に来てからの記憶が頭の中を濁流のように流れる。

（何故……こいつが謝る？……何故今になって、しかも……）

知らぬうちに握りしめていた拳に更に力がこもる。短く切りそろえている爪が肉に食い込むのが分かった。

今、自分がどんな顔をしているのか分からない。

ただ、自分の意思と関係なく、引き攣れたように顔の筋肉が動くのが分かった。

掠れ切った喉を無理やり動かす。

「……探していた……だと？」

自分でもこんな声が出るのかと、頭の片隅で場違いに思うほど、その声は低く掠れ憎しみに塗れていた。

溜まり溜まったこの世界に来てからの恨み辛みが、体中を荒れ狂い毛穴からにじみ出るかのように感じた。

土下座している小さな子供の身体が、ピクツと小さく震える。

「……貴様らが無理やり私をこの世界に拉致つてきた拳句、右も左も分からん私を文字通り放り出して……あの場で助けてもくれなかつたくせにつ……それを今更のこのこ現われて、探していたと抜かすかつ!!」

「……申し訳ありませんっ」

「今、謝るくらいなら何故あの時助けてくれなかつた!? アンタらの勝手な都合で召喚されて! 気に食わないからって引きずられて放り投げられてっ!!」

目の前が真っ赤に染まる。情けないほど震えながらも、興奮に伴い徐々に声が大きくなる。目が異様に熱い。握りしめた震える拳にボタボタと涙が落ちる。

事情が把握できずとも、篤美の剣幕に押されたのか、少し前のヒュルト・マクゴナル・トゥーラの発言にざわついていた騎士達は息を潜めるように静かに此方を見ていた。

「……っ謝るくらいなら、還してよ!!……ねえ、アンタらにこの世界での国や生活があるように……私にもあるんだよ……自分の国も! 仕事も! 大事な家族も! 友達も!!」

興奮に身を任せ、立ち上がる。ガタンっつと椅子が倒れる音がする。全身を震わせ叫ぶ。

「全部っ! 全部っ!! 私の大事なものをお前らが奪ったっ!! 大事

なっ……私の居場所をっ……！！！」

「……っ今更謝ってすむとでも思ってたのっ！？ふざけんじゃねえよ！……てめえらは何様だ！！違う世界の人間の人生まで好き勝手しやがってっ！神にでもなっただつもりかっ！！！」

「ふざけんなっ！！還せよ！還してよっ！！こんな世界、私の世界じゃない。私の居場所じゃないっ！」

「私のっ……私のっ……私の全てを返してよお……」

膝の力が抜け、ベッドのシーツにしがみつくように膝まづく。

「……ああ……あ、あ……ああああああああああああああああ
ああ……」

自分の中から生じた爆発的な衝動に身体はコントロールを失い、ただただ気が違えたように、ナニかを吐き出すように衝動のままに哭く。

「……ごめん、なさい」

泣きそうな小さい声が聞こえた。

全身を震わせながら、悲しみに塗れた獣のように慟哭する彼女。

その姿は痛々しい。

もはや言葉として意味をなさぬ声を叫んでいる彼女の頭に魔力をこめた指先を軽く触れさせる。

その途端に、哭く声がピタリととまり、糸の切れた操り人形のように身体が力なく崩れ落ちた。シーツにすぎるように背中をまるめてうつ伏せている彼女の腕をとる。

身体が幼くなつたことで腕力もそれ相当になつたようで、彼女が未だ指先が白くなるほどシーツを握りしめていることもあり、気を失っている彼女をベッドに寝かせようと引っ張るもなかなか動かない。

彼女の気が違えたかのような様子に呆然としていたケデイが、ハッと一番に正気づいて彼女を抱きあげてくれる。

すかさず彼女に場所をゆずり、シーツをまくる。心得たようにケデイが彼女を壊れ物を扱うようにそつと寝かせ、まくつたシーツを丁寧に彼女に被せる。

あれ以上叫んでいたら、おそらく間違いなく喉を潰していただろう。

熟練の修羅場慣れた騎士であるガデイすら呑まれた、怒りと憎しみと悲しみに満ち溢れた慟哭。

泣き声なんて生易しいものじゃない。あれは慟哭としかいいようがない。

簡単な魔術で眠らせたが、彼女の眦からは未だに大粒の涙が後から後から零れ出でて止まる様子もない。

眠っていることを確かめているのか、涙を拭ってあげているのか分からないが、ケデイが傍から見ても優しくそつと彼女の頬に触れ、すぐに手を離れた。

昔から変わらない、厳めしい顔が、今は困惑にかすかに歪んでいた。

「……………眠らせたのか？」

「……………うん。少し休ませないと。あのままじゃ間違いなく喉がダメになっちゃう」

「なあ……………ヒュー」

「……………ちゃんと説明するよ。俺への襲撃のことも……………彼女のことも」

狂ったように泣き叫んでいると、ナニカが自分の中に入った。
一瞬で全身の力が抜ける。

叫び枯れかけていた喉はその機能を完全に止め、全身に力が入らな
いため閉じてしまった瞼を開けることもダランと脱力した手足を動
かすこともできない。

ただ意識だけはハッキリしていた。そして、つい先程まで気が違え
そうなほど荒れ狂っていた頭も心も一気に冷め、落ち着いていた。
まんま金縛りの状態で、ゴツイ腕に抱き上げられベッドに寝かせら
れる。

頬に優しく触れる温もりを感じたが、正直何勝手に触ってやがんだ、
と思う。許可なく女に触れるのは失礼だ。例えそれが40代のオバ
サンであろうとも。

涙腺が決壊したかのような勢いでダバダバ涙が頬を伝う感触がする。
指一本動かせず、それを拭う事もできない。かなり気になるが、大
人しく動くようになるまで待つしかないのだろうか。

ほんの数分前までの激情はいつそ清々しいほど、なくなっていた。

「……ちゃんと説明するよ。俺への襲撃のことも……彼女のことも」

ヒュルト・マクゴナル・トゥーラの子供らしい高めの声が聞こえた。
さて、彼はありのままを話すのだろうか？ 国家権力の狗とも言える

騎士団の人間に。

「これから話すことは口外無用だからね。俺も嚴重に口止めされているから、どっかから噂話とかでちゃったらかなりヤバいんだよね。」

「前置きはいいから、とつとと説明しろ、ヒュー坊」

「その呼び方やめてよ、ケディ。確かに今はこんな姿だけど、子供じゃないんだから」

「ヒュー、話をすすめて」

「あ、ごめん。えっと……初めから話そうか」

複数の話声が聞こえ、仮にも騎士団長とその下の騎士とは思えないフランクさで会話がなされているのに、内心首を傾げる。（生身の肉体はまだまだ動きそうな気配がない）

「本来の花嫁召喚の儀は王太子殿下の18歳の誕生日にされる予定だったんだ。陛下に妃を娶る年頃になったと判断された年の誕生日の日に誕生祝いと共に召喚された花嫁との婚約を行うのが慣習だからね。……否、実際誕生日の日にもされたんだけど、そっちは知ってるでしょ？殿下の誕生日に召喚された花嫁が現王太子妃殿下。でも実はその一月前にも花嫁召喚を行っていた。その時に召喚されたのが彼女、アチュミ・タニジマ様なんだよ」

「殿下がどうしても誕生日の婚約の前に花嫁を召喚したいとごねられてさ。せっかく婚約するんだから、会ったその日に婚約するよりひと月くらい早めに呼んで仲良くなっておいてから婚約する方が花嫁にとっても自分にとってもいいだろう、との仰せでね。」

「召喚の準備やら花嫁を迎える準備があるから、初めは陛下も反対しておられたんだけど、どうやら王妃様に泣きついたらみたいで。陛下は王妃様に強く出らないから結局押し切られてしまったんだよ」

「で、受け入れ準備も万全と云い難いし、貴族への紹介とかできるだけの余裕ができるかどうか分からなかったし、殿下が、呼んだ花嫁との時間を貴族との挨拶だのに使いたくない、婚約したらどうせ嫌でも公務や王妃教育が始まってゆっくり時間も取れなくなるから今くらい極力二人つきりで過ごしたいと仰られて、結局ごくごく限られた人数で緘口令が敷かれた状態で召喚を行ったんだよ。だから、このことを知っているのはあの時召喚に立ち会った者だけのはずだ」

(……そんな事前事情があったとは。あのクソ王子、どうしようもねえなあ、おい。ていうか王妃に泣きついたってマザコンかよ。ちよーキモいし。)

身体が動かせないか、試しに指先に力を入れてみる。先ほどまではピクリともしなかったが、ぎこちなくゆっくりとだが指が動いた。脛に腕に口に喉に、ゆっくりと力を入れ慎重に動かす。

「召喚の儀で彼女は異世界からこの国に召喚された。けど、殿下は……」

「『こんな不細工な女、冗談じゃない。……とつと追い出せ』」
上半身をゆっくり起こしながら、この二年、一度として忘れたこと
がない発言を一字一句違わず言う。

「そう言つて、私は文字通り城の中を引きづられて城門の外へ放り
出されたわ」

全員の視線が子供から此方に移ったのが分かった。特に此方に背を
向けるようにベッドの端っこに腰かけていた子供が勢いよく振り返
った。

「気がつかれましたか？」

「最初っから意識だけはあったよ。身体は動かなかつたけど。何か
したの？」

「あ、えっと……ひどく取乱してらっしゃったので……ひとまず一
度眠っていたかどうかと思つて……すいません」

「……気分は？」

「最高とはとてもじゃないが言えないけど、一応御蔭さまで落ち着
きましたよ。副団長様。すいませんね、取り乱しちゃいまして」

「いや……」

「……どうぞ」

「あ、ありがとう」

涙でガッビガビになっている頬を擦りながら、熊二号へと顔を向ける。が、何故か頭を掻きながら目を反らされた。……そんなに見るに堪えない顔になっているのか。

バルト・クエーツが水と濡れタオルを持ってきてくれた。有り難く礼を言い、垂れ流して泣いたせいでペキペキする顔を濡れタオルでざっと拭い、コップの水を一息で飲み干す。

「続き、どうぞ。もう冷めたし、これ以上取り乱したりしないから」

「あ、はい。その、殿下が今アチュミ様が仰ったことを言われて、混乱してらっしゃったアチュミ様を連行しようとしたものですから、神官長殿やシリア達と懸命に説得しようとしたんだけど聞く耳を持たれなくて……」

「奮闘の甲斐なく結果的に放り出されたと」

「そういふこと」

「何も殿下の前で助け舟を出さずとも、放り出された後にはれないようにシレッと回収すればよかったですんじゃないんですか？」

わざわざ「はい、先生！」と言わんばかりの姿勢で狐君が発言した。その問いに、子供は眉間に皺をよせ、可愛い顔には似合わない渋い顔をした。

「それができていたら、こんなことになっていないよ。アチユミ様には言い訳のようになってしまいますが、殿下はあるうことか、あの場にいた全員を次回の召喚会議と称して一昼夜拘束しやがりました。その間、部下は勿論、侍女達とも接触が一切できませんでしたから、その時はどうすることもできず……拘束が解けたらすぐに探しにいったんですけど、手掛かりもなく、なかなか見つけることが出来なくて……悪いのは全てこちらなのに……その責任をとるべきなのにそれも果たせず、しなくてよい苦勞をさせてしまいました……」

しょんぼりと子供が頂垂れる。思わず頭を撫でてやりたくなるほどの凹みっぷりである。そんな状況ではないかもしれないが、ちょっと可愛い。

この子、すごく真面目だね。弄られ真面目君的な臭いがする。思わず手をワキワキさせていると、熊二号が此方をガン見しながら問いかけてきた。

「放り出された後、どうなったんだ？この街に来たのは一月前なんだろう？」

「黙秘権を行使する」

「……何故に？」

「ぶつちやけ思い出したくない」

「う、も、申し訳ありません。俺たちが殿下をお止めできていれば

っ
……」

子供が半べそかいて、また謝ってきた。

あらやだ……何この子、可愛い。

可愛いがこのままベソベソされても話が進まない。溜息を一つ吐いて彼の頭をガシガシ撫でくり回す。それはもう、グワングワンと。驚いたのか、子供は目を見開いた状態で此方を凝視しつつ固まっている。

「あのねえ、さっきあんだけ泣き喚いという説得力無いかも知れないけど、別に今更どうだっていいのよ。アンタに何度も謝ってもらったって、過ぎた時間は戻らないし元の世界にや還れない。正直、もうとつくに諦めついてんの。さっきのは……まあ、アレよ。頭に血が上がったってヤツよ。ぶっちゃけ八つ当たりよ。私がアンタに八つ当たりしたのと、アンタが私を助けようとしてくれてて、ちゃんと謝ってくれたってことでとりあえずこの場は互いにチャラにしようや」

「……八つ当たりですか？」

「うん」

「どう考えても正当なお怒りであり、俺ら、あ、否、私達は憎まれて当然だと思っんですけど……」

「別に丁寧言い換えんと普通に話してくれて構わんよ。この社会に適応するのならば、むしろ私がアンタに丁寧に話すべきなんですし

ようよ。けど悪いが、私あ色々と諦めまくってはいるが、この国の理に従うつもりはないんでね。お前さんが王族だろうが騎士団長だろうが敬う気は一切ない!!」

「……俺、そんなに堂々と敬う気がない宣言されたの生まれて初めてです……」

「だろうね」

にやり、と顔を笑の形に歪める。

頭を篤美に鷲掴みされたままの状態で呆然と此方を見ていた子供が、ガツクリと脱力するように肩から力を抜いた。口元にはやや呆れたような笑みまで浮かんでいる。

お互いに多少のクールダウンができたようだ。これならば、次の話に進んでもよからう。

「さて、私の話はもういいだろ？次はアンタの番だよ」

少しだけ緩んでいた子供の顔が、スッと真剣なものに変わった。

十二話（後書き）

微妙な長さになったので、切りがいいところで分けました。

モブ王子の現状があきらかに！！と、前回、活動報告にも書いてしまっていました。申し訳ありません。

モブ王子の召喚時のことしか入りきりませんでした。

次回！！次回こそは、モブ王子の現状が明らかになります！なるはずです！

十三話

「その前にちよっといいですか？」

話に水をさすように狐君が口を開いた。

「かなり今更なんですけど、僕ら彼女の名前を知りませんし、僕らもまだ名乗ってませんよ。副団長とバルト君は顔見知りみたいですけど、僕ら一応初対面ですし」

今後協力してもらうなら、自己紹介くらいした方がいいでしょ、と少しおどける様に肩を竦めた。

確かにその通りだが、本当に今更な気がする。

ヒュルト・マクゴナル・トゥーラがきよんとした顔で首を傾げた。

「昨日の夜からお邪魔してたんだよね？なんでしてないの？」

「何かそついう雰囲気じゃなくて」

にしゃ、と狐君が笑う。ヒュルト・マクゴナル・トゥーラが呆れた顔をして溜息を吐いた。

お世話になるなら普通最初にするでしょ……と口の中で小さく呟いて、じろつと熊二号の方を見た。熊二号は素知らぬ顔でそっぽを向いた。

頭が痛いと言わんばかりの顔で、額を抑える。

「えーと、なんか、すいません。じゃあ先に改めて自己紹介しましょうか……」

真剣な顔を力が抜けたと言わんばかりに情けなく眉を下げ、こちらに伺いを立てるように目をむけた。

軽く肩を竦めると、了承の意を頷くことで伝える。

「では改めまして、ディリア騎士団長及びチュルガ領主を務めていますヒュルト・マクゴナル・トゥーラです」

「アーチャ・タニージャよ。本名はこっちの人間には発音しにくいみたいだね。この名前で通している」

握手をするために右手を差し出す。きよとんとした顔で差し出された右手を不思議そうに見るが、意図を悟ったのか少し慌てるように握り返した。

小さくて温かい子供の柔らかい手だ。

二、三度上下に振ると、手を離れた。それを見ていた狐君が首を傾げた。

「そんなに発音しにくい名前なんですか？」

「アツミ・タニジマ」

「アチユミ・タニジマ……普通に言えますけど？」

「アチユミじゃない、アシミ」

「アチユミ」

「あ・つ・み」

「あ・ちゆ・み」

「っ！」

「ちゆ」

発音の違いがいまいち分からないのか、納得いかない様に首を傾げて狐君がぶつぶつ練習するように何度も呟く。

それを軽く無視するように、ヒュルト・マクゴナル・トゥーラが熊二号を指さす。

「アーチャ様、彼はディリア騎士団副団長のケディ・イザークです」

「様はいらないよ、トゥーラ殿。彼とは一度会っているから知っている」

「僕も敬称は不要です。それと僕のごことはヒューと。親しい人は皆そう呼んでますので」

「了解。よろしく副団長さん」

「ケディで構わん。しかしアンタ、昨日から思ってたが初対面の時とは随分印象が違うな」

にやり、と熊二号改めケディが面白そうに口角をあげる。

「初対面の人間に丁寧に接するのは常識でしょう？それに散々素を見られたうえで今更猫被るなんざ面倒じゃない」

こちらにもやり、と笑い返して彼と握手する。手を離れたのを確認したヒューが今度は未だに一人でぶつぶつ呟いている狐君を指さす。

「彼はウィル・ディザイル、ディリア騎士団員で俺の側近兼乳兄弟です」

名前を呼ばれたのにハツとした狐君は、ぶつぶつ呟くのをやめこちらを見てにしゃ、っと笑った。

「どうも昨夜からヒュー共々お世話になっています。ご紹介に預かりましたウィル・ディザイルです。ウィルでもウィリーでも好きに呼んでください」

「よろしく」

「はい、よろしく願います」

ニコニコ笑いながらあちらから握手を求めてきたので握り返す。笑うと目が細くなり、さらに狐っぽい表情になる。随分フレンドリーな男のようだ。

「その隣にいるのが、もう一人の側近のヴォルフ・ノーランドです」

ヴォルフ・ノーランドがペコリと頭を下げる。茶色い髪の毛の地味ながらよくよく見れば整った顔をしている。手を差し出すと、戸惑ったように手を彷徨わせ、遠慮がちに軽く手を握り返した。

「ヴォルフは基本的に無口で人見知りか激しいんですよ。こいつのことはヴォルフと呼んでやってください」

「了解。よろしく頼む」

狐君がヴォルフ・ノーランドに横から押し掛かるように彼と肩を組む。随分と仲がよさそうだ。

彼の茶色の目を見てそう言うと、彼はまた無言で頭を軽く下げた。

「最後に、彼は最近赴任してきた魔術師のバルト・クエーツです。彼は俺の友人の弟弟子になります」

「先日はご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。バルト・クエーツと申します。あれからお詫びに行こうと思っていたのですが、来たばかりでごたごたして……本当に申し訳ありません。お陰様で助かりました」

「別に気にしなくてもいいよ。大したことをしたわけじゃない」

「でも、服も汚してしまいましたし……」

「別にいいよ、本当気にしてないし。体調は大丈夫かい？」

「はい。あの時は人ごみに酔ってしまっていて……」

「なら、よかった」

「……ありがとうございます。これからよろしくお願いします」

「「ちら」そ、よろしく」

薄く笑ってバルト・クエーツと握手する。彼がへにやっと眉を下げるように笑う。

「では、自己紹介も終わりましたし、こちらの事情をお話しますね」

改まったように姿勢を正したヒューの言葉に、握っていた手を離し、

ベッドの上で壁に寄りかかるように座りなおす。

「今の俺の状況というのは、元を糺せば全てアーチャも深く関わる花嫁召喚の儀にあります。先ほども申した通り、アーチャが殿下によつて城を出された後、俺らは殿下に拘束されて、花嫁を召喚したばかりであるというのに次の花嫁召喚の話し合いをさせられました。そこで決まったのは、細々したことを除けば大きく二つ。一つは当初の慣習通りに殿下の誕生日に再び花嫁召喚の儀を行うこと、もう一つは……」

ヒューは言葉を一旦きると、なにやら苦虫を噛み潰した顔で俯いた。

「もう一つは、召喚の条件付けの変更です。召喚術というものは大雑把に言うと、基本的に一つもしくは複数の条件に基づいて召喚が行われる仕組みになっています。花嫁召喚の儀では代々王家の花嫁に相応しい者、という条件で行われていました。そこに年齢や容姿、性格などの細かい条件は賦与されていません。何を持って王家に相応しいか、という判断がどう成されているのか、ということは分かりませんが、それでも代々の王はその条件付けで花嫁を異世界より呼び出してきた。殿下はその条件を変えると仰った」

「勿論、我々は反対しました。殿下が提示された条件はとても承諾していいものではなかった。あの召喚の儀にいた者は皆、言葉を尽くして殿下を諫めました。しかし、殿下がそれに聞き耳を持つことも、撤回することはありませんでした。この国の貴族たちは決して一枚岩ではなく、常に派閥争いを繰り広げています。国のことを考えれば諫めるべき条件内容であったのに、殿下に媚び諂い、利権を

貪る有力貴族らの後押しもあって、召喚の条件付けの変更は決定事項となりました」

「その条件の内容は？」

「年齢は14歳、成長しきっていない容姿端麗で、無垢な可愛らしい娘」

「……変態？」

「変態です」

「この国の成人は男女共に16歳だと記憶してるんだけど？」

「その通りです。婚姻も基本的に成人を迎えないとできないことになっていきます。しかし通常の婚姻ならばともかく、今回は次期国王の婚姻。実情はともかく対外的には王家に相応しい者という条件で呼び出された異世界からの花嫁ですから、本来婚姻が許される年齢ではなくとも婚姻が可能になるんです」

「それ故の殿下の条件です。成人未満の子供に手を出したら王族といえど白い目で見られます。しかし、花嫁として召喚すればそれはない。殿下は自らの汚らしい願望を満たすために条件を変えました。そんな愚物が次の王かと考えると絶望したくなりますが、殿下は王妃の第一子で王位継承権は第一位、既に立太子もすませています。もはや殿下が王位を継ぐことは決定事項であり、多少のことならもみ消すだけの権力は当の昔に手に入れています。異世界から来た王妃の後見となった有力貴族の力によって。ですから、今回の召喚条件も対外的には慣例通りにみせかけ、その実、殿下の変態的希望をかなえる条件で行われました」

「結果的に召喚された花嫁は本当に子供でしたよ。姿も中身も。おそらく貴女と同じ国の人です。彼女の肌はもう少し白かったのですが、この世界にはほとんど見ない象牙色で髪も目も黒かった。そして実年齢より若く見えるところも一緒です。彼女は確かに条件通り14歳でしたが、俺の目にはせいぜい10歳前後にしか見えなかった。殿下は彼女が現われたとき大喜びでしたよ、それはもう気持ち悪いくらいに」

「私が放り出されたのも、その幼女趣味の変態にしてみりや最悪の条件の女だったからってことかね」

「そうなります。殿下の性的嗜好を把握していれば事前になにかしらの備えができたのかもしれませんが、巧みに隠していたみたいでして。今回のことで露見した形になります」

「召喚された子は？結婚したって聞いてるけど」

「彼女は……召喚されてすぐはずっと泣いてました。家に帰して、家族のところへ帰して、と。脂下がった顔で気を引こうとする殿下も世話をする侍女達も寄せ付けず。しかし……」

中性的な可愛らしい顔立ちには似合わぬ渋い顔をしていたヒューの顔がさらに歪んだ。

途切れた話を引き継ぐようにケディが口を開いた。

「何がきっかけになったかは分らんが、護衛の任についていたヒューに大層懐いてな。それからは明るくなった。周囲の人間とも話

をするようになったし、笑顔も見せるようになった……が」

「『異世界トリップには、逆ハーがつきものだよ』とか訳の分からないことを言っ、殿下には見向きもせずにはヒーやシリア殿をはじめとする顔のいい男に付き纏い始めたんですよ。ちなみに僕も纏わりつかれましたよ」

ウィルが鼻で笑いながら、吐き捨てるように言った。
その場にいた篤美以外の全員が苦り切った顔になる。

『異世界トリップ』『逆ハー』

『異世界トリップっていいよね』とキャピキャピしながら話していた塾の教え子である女子中学生達と同じ嗜好だったのか。召喚当時は14歳ならば彼女らと同世代だ。十分あり得る。まさか読んでいた小説のような事態に自分になるとは思っていなかった。ただろうが、それでも変えようがない現状に気づいたら喜んでいない。

異世界の花嫁として召喚。

王子は残念ながら平凡だが、それを補うように周りにいるのはイケメンぞろい。

綺麗なドレスに可愛らしいメイド達。皆が彼女を大切にお姫様として扱う。

それに気づいた瞬間、彼女は読者から物語のヒロインになったのだらう。

そりゃあ、自分が好んで読んでいた物語と同じような状況になっていることに気づいたのなら元気にもなる。

どこまでもヒロインとして愛されようとするだろう。否、物語のよ
うに彼女は愛されなければならない。

そしてヒーローは素敵なイケメンじゃなくてはならない。

自分に優しく自分を愛してくれるのなら、身分など関係ない。む
しろ王太子妃と騎士や魔術師とのラブロマンスなんて、設定的に美
味しすぎる。ヒューに懐いたのは必然だろう。

目の前の洗面をした彼らには悪いが、笑いだしそうだ。そんな雰囲気
ではないから、必死で耐えるが。

「王太子殿下には懐いたの？」

「まあ、普通には。なんとか言いくるめて婚姻させることができま
したから、彼女は殿下を嫌ってませんよ。別に特別好きでもないよ
うでしたが」

「気を引こうとして大量の贈り物を送ったり愛の言葉を囁く殿下よ
りも、特にヒューに好かれようと追いかけてまわすのに一生懸命でし
たから、眼中にないというのが正確なところじゃないですか？」

「すごかったぜ？ヒューが護衛の時はべつたりくっついて離れね
えは、それに嫉妬した殿下に護衛の任を解かれて離されても、隙あ
らば部屋を抜け出て騎士団の詰め所を襲撃しやがって、これまたヒ
ューにべつとり」

「顔のいい男にばかり懐いていましたが、特に人のいいヒューに懐
いてましたからね。シリア様もそれはもう凄まじい美形ですけど、
あの方は愛想とか優しさなんて言葉は無縁な方ですし」

「いきなり知らないところに連れて来られて不安で泣いていたところを優しくされて惚れちまったってやつ？」

「おそらく。迷惑な話ですが」

「これで性格がマシだったらよかつたんだが、ありや天性の男好きだな。ヒューだけじゃなく、顔のいい男は皆自分のものにしたらしい。ガキのくせに一端の飢えた女の目をしやがるんだよ」

「本当怖いですよ。無邪気に可愛らしく笑っているのに、目が異様にギラギラしてるんですもん。ヒュー達には可愛らしく愛想を振りまくのに肝心の殿下にはそっけないものだから、殿下が嫉妬に狂って執務をほっぽり出して妃殿下の後を追いかけてまわすは、彼女にそういう意味で懐かれた人間を問答無用で左遷、もしくは降格して無理やり引き離そうとするは」

「要はどこまでも彼女は子供なんです。素敵な玩具を貪欲に欲しがり、それを見せびらかしたがる」

「まあ、あの平凡なツラじゃその子のお気に入りにはならなかったわけね」

「そういうことじゃないんですか？あの手この手で誤魔化して殿下と婚姻はしてもらいましたけど、殿下には見向きもしませんし。初夜もなんだかんだで部屋を追いだされて、結局僕らが左遷されてここに来るまで、清い関係ままでしたし」

ああ、なんてことだろう。

力を入れすぎた顔の筋肉と腹筋がプルプルして引き攣りそうだ。

少しでも気を抜けば、全力で笑い転げてしまうだろう。

篤美を放り出し、望む理想の花嫁を手に入れたはずのあの憎たらし
いモブ王子が全く相手にされずに、呼んだ子供は他のイケメンを追
いかけてまわしているだと？

なんて愉快な状況だ。面白すぎる。腹筋が崩壊しそうだ。

王太子妃の巻き起こした事態のとはっちりを受けている目の前の彼
らには悪いが、彼女をハグして拍手喝采してやりたい気持でいつぱ
いだ。

モブはモブらしく物語の主役に相手にされず、ヒロインは自分のヒ
ーローに夢中になった。

身分が高かろうと権力を持っていようと、モブは所詮モブ。ヒーロ
ーになんかなれやしない。

ああ、叫びたい。この昏き歓喜を思うがままに叫びたい！

爆笑と歓喜の雄たけびを我慢してプルプルしていると、ウィルから
追加爆撃があった。

「婚姻前も婚姻した後も殿下を見向きもせず
に他の男を追っかけてまわしてましたが、
拳句の果てにヒューに本気になったらしく、
殿下と離縁してヒューと結婚するとまで
言いだしたんですよ」

「……つぶほお……」

堪え切れず吹き出してしまった。

零れてしまいそんな笑い声を、手で口を押さえることで必死で止める。

十四話

喜色満面で、突然両腕を振り上げ叫んだ篤美に室内の時間が止まった。引き攣った顔で静かに此方に向けられた視線を無視して、篤美はやりきった感満載で肩で息をしていた。昨日からこつち、浮き沈みが激しすぎて、散々笑い転げた挙句に腹から叫んだ後、急激に訪れた疲労感に息が中々整わない。

しかし、篤美はこの世界に来て嘗てないほどテンションが高まるのを感じていた。

上がり続けるテンションに、身体は苦痛を訴えても一切気にならな。呆然と固まる若い騎士達を解凍するために、パンツと大きく一度だけ手を叩いた。

その瞬間、ビクツとなる若い騎士達。ケデイもとい熊二号は動じずニヤニヤしていた。

未だに引き攣った顔をしているヒューにっこりと営業スマイルを向ける。

「悪いね。予想外の面白すぎる状況につい笑いが押さえきれなくて」

「…………え、え〜と…………あの…………」

「ああ、もちろんアンタらには笑える状況じゃないってのは分かっているから。本当、クソの役にも立たんようなボンクラ変態が国家最高権力者予備軍だなんて、心の底から同情するわ。強く生きて頂戴…………ぶぷっ」

「え、え、ええええ…………」

「しっかし、呼びだしたアホもアホだけど、呼びだされた方も大概ねえ……いや、同じ拉致られ仲間だし？向こうは10代の子供だし？さらには変態に付き纏われてるんだから大いに同情はするけど？同情はするけど、なんだかなあ……若さ？若さなのかしら？それとも単に頭が残念なのかしら？話を聞いている限りじゃ、何か色々楽しんでるみたいに聞こえたんだけど。歳か？歳のせいで耳が聞こえにくくなつてののか？それとも、本当に楽しんじゃってるわけ？この糞つたれな世界で。やっぱ若さ？若さ故の馬鹿？ていうか、その子状況見えてないんじゃない？自分の周りが見えてたら、そんなアホな真似を堂々とするわけないし。……ってああ、だから子供なのね。納得したわ」

「は、はあ……」

捲し立てる様にノンブレスで言いきると、気の抜けた返事しか返ってこない。

口を開けて間抜け面した顔は、とても騎士団長にもやんごとなき身分の人間には見えない。平然として、むしろ面白そうにニヤニヤしているのはケディくらいだ。

「ま、大体事情は分かったわ。大方、愛しの姫君が夢中になっているヒューが疎ましくて、いつそ消してしまいたいでしょ？？ボンクラ殿下様は」

「そんなとこだな。俺らがここに来たのは大体、一年くらい前だ。国の守護を司る騎士団や国家魔術師ってやつは完全実力主義でな、騎士団総長って地位についてる実力は伊達じゃねえ。今んとこ、国

で一番の実力を持っていて、ついでに騎士団の奴らにも好かれている。それぞれ特質の異なる三つの騎士団をまとめることができたのはヒューくらいのもんだ。本当のところ、向こうさんは暗殺するか適当な罪状を被せてさっさと殺しちまいたかつたんだろが、現国王陛下が在位の間はとも手が出せない。陛下はヒューに目をかけているし、ヒューが国の守護の要の一つだとしっかり分かっているからな」

「しかし、自分の意中の女が惚れたからって普通殺そうとまで思うかね？」

「俺には理解できんがね……だが、ヒューを擁護していた陛下がつい先日お倒れになった。床から出ることもできなくなり、本格的な譲位の準備が始まった途端、ヒューに刺客が来るようになった」

「……目の上のたんこぶがなくなった途端、動き出したか……いよいよとち狂っているとしたか言いようがないね」

「ああ。ヒューだけじゃない。俺みたいな引退までそう長い時間がない人間ならともかく、次代の王の御世で中心となって王と共に国を治めていくだろうと見込まれていた優秀な若い奴らが何人も、あの小娘に好かれたからという下らん理由で左遷や降格され、国の中枢から離された。このまま譲位が成され、アレが王になったら本当にこの国はヤバイ」

「ヒュー以外で命が狙われそうな男はいるのかい？」

「……いや、思いつかん。見る目がある奴らは早々にあの小娘と接点を持たない様に動いていたし、已むに已まれず関わってしまった奴らもヒュー程好かれていないからな。逆に言うと、ヒューへと偏

り過ぎてて、まだそれ以外に目を向ける余裕がないってだけかもし
れん」

「ヒューがまだ生きているから、他に狙われる人間が辛うじて出て
いないってわけ」

「そういつこつた。今回の襲撃は森に魔獣の調査に行ったときだ。
それまでは皆やらに来てたんだが、バルトに来てもらってからはそ
れがなくなった。こいつは結界と守護、治癒の魔術に関してはかな
りの実力者だからな。そん代わり攻撃系はからきし駄目だ。しばら
く砦から出なけりゃ向こうさんもそのうち飽きるだろうと割と暢気
に構えてたんだが、森の入口周辺で魔獣の目撃情報がきちまったん
だよ。はぐれ魔獣の可能性も捨てきれんし、高位の魔獣だったら若
い奴らだけじゃ手に負えねえ。仕方なくこの面子で調査に繰り出し
たらこの様だ」

「相手は魔術師三人に剣士が五人」

「それに暗器使いもいましたよ。ヒューと離された後、剣士も何処
に隠れていたのやら八人も出てきやがったんですよ」

「あ、俺、そいつら知らない」

「そりゃそうでしょ。ヒューったらすぐ魔術師追いかけて行っちゃ
ったし、僕らの制止を無視して」

「いつも一人で突っ走んな、って言うてんのに、誘われてほいほい
ついていきやがって」

「……す、すいません……」

ジロツと四人から責められるように見られ、縮こまりながらヒューが小さく謝った。全員がそろって溜息を吐いている様子を見る限り、ヒューが単独行動で無茶するのは日常茶飯事なことのようである。

「俺らがヒューを見つけた時にはこの姿で倒れていた。何があった？」

「魔術師の死体は二体しかありませんでしたよ」

「うん。三人のうちの二人は割と速攻で殺ったんだけど、残りの一人が面倒な奴で……」

「知ってる奴か？」

「皆名前くらいは聞いたことがあると思うよ。シャリー・フォレッツト、自称・喜劇の魔術師」

「……あの愉快犯か……」

「うん。他の二人は俺を殺す気満々だったのに、彼だけはなんか違った。命令は俺を殺すことのはずだけど、何を思ったかは知らないけど俺をこの姿に変えた途端に引きあげていったよ」

「……一体、何を考えているんでしょうね……」

「さあね。ただ、彼がどう動くのであれ、僕が生きていることは知っているのだから多分間違いない刺客はまた来ると思う」

「……面倒だな、おい……」

「本当にね」

「全力で行きたくないですけど、戴冠式には出席しなければいけませんから、それまでには彼を捕まえて元の姿に戻らないとマズイですよ」

「……だよねえ」

はああああ、と篤美を除く全員が疲れたように溜息を吐いた。ふと、窓の外に目をやると茜色の空が見えた。随分と長い時間話し込んでいたようだ。

時間の経過を意識すると、途端に空腹を感じた。

「アンタらの事情はよく分かったよ。アンタらには悪いが、私にやかなり面白い状況だからね。喜んで協力させてもらっわ」

疲れた顔をする彼らをニヤニヤ眺めながら言うとケディが嫌そうな顔をした。

「……楽しそうだな、おい」

「楽しいね、色んな意味で」

ケデイの顔を見ながら厭らしく笑みを深くすると、大きく舌打ちされた。

実際楽しくて仕方がない。王族も、この国も、ほんくらモブ王子も憎くてたまらないが、復讐なんてしようとは思っていない。そんな体力・気力があるほど若くはないからだ。

……が、今のこの国の現状は愉快でたまらない。まさに沈みゆく船の状態だ。賢い鼠ならば逃げ出し始める頃合いだろう。篤美が何をしなくても、この国は傾いていく。

彼らにほんの少し協力するだけで、その様を身近で眺めていられるのだ。こんなに愉しいことはない。

これで元に戻ったヒューが王太子妃を寝盗ってくれたりしたら最高だ。あのクソ王子に少しでも多くの絶望を味あわせてやりたい。

そのためには、まずこの姿のヒューを守り、魔術師を探す必要がある。魔術師は目の前の彼らが探すだろうから、篤美はヒューを匿うだけでいい。

ただそれだけでこの国の中心の奴らに泡食わせてやれるのかと思うと、年甲斐もなく胸が高鳴った。

「私にどんな思惑があるうと、アンタらには協力が必要だろう？ そして私は是非ともヒューに元の姿に戻ってもらいたい。その方がより面白くなるからね。お互い目的は一致しているんだ、よろしくやるうぜ」

にやりと笑うと、ケデイが面白そうな顔をした。

「一応聞くが、アンタの思惑ってのは何だ？」

「別にたいしたことじゃないよ。ただヒューがぼんくら殿下の愛しの姫君を寝盗つてくれたら楽しいなあ、とか、諸々引っかき回してくれりゃ退屈しないでいいなあ、とか、いっそ王位を篡奪してくれりゃ愉快だなあ、とかその程度だよ」

「……最初の二つはともかく、最後のはその程度じゃすまねえだろ」
「別に私がおかするわけじゃないし、単なる願望よ。願うのはタダじゃない。私みたいな中年のオバサンが国を相手に何かしようとしたところで何もできないのがオチでしょ。そういうのは若人に頑張ってもらおうもんだよ」

「他力本願もいいとこだな」

「若者たちがあくせく働いてるところを高見の見物させてもらうわよ、ニヤニヤしながらね」

「……アンタ、本っ当イイ性格してるな……」

「あら、ありがとう。褒めても何にも出ないけど」

「褒めてねえよ」

「まあ、冗談はともかく……」

「……どこまでが冗談だ」

「ちゅあ？」

「……おい」

「もう夕方だし、そろそろお腹すいてきたでしょ？現状確認はできたわけだし、匿うにあたっての細かいことはご飯を食べながらしましょ」

ベッドからのそりと下りる。言われてみれば、という顔をしている騎士達。ケデイが溜息を吐きつつ、頭をガシガシ掻いた。

「この人数分の飯を用意するのはシンドイだろ？何か適当に買ってくる。ヴォルフ、手伝え」

「あら、助かるわ。じゃあ、私は簡単なスープでも作るかな」

「僕も手伝いますよ」

「手伝ってもらえるのは有り難いけど、ウィルって料理できんの？」

「野営料理なら僕が一番美味しいものを作りますよ」

「そいつは頼もしい。よろしく頼むわ」

肩を竦めて、にしゃ、と笑うウィルと並んで台所に向かう。そこにケデイから声がかかった。

「なあ、この家に転移門を設置してもいいか？」

「転移門？」

「簡単に言うと離れた場所から転移移動するためのもんだ。こいつを設置しておいたら、例えば魔力がギリ貧でも移動できる」

「へえ、便利だね。別に構わないよ。正面の玄関はさすがにマズイけどね。人通りがほとんどないとはいえ一応道に面してるから、もし見られたら面倒だ。風呂場に裏口があるからそこならいいよ」

「……何で風呂場に裏口があるんだ？」

「ウチは家の裏に井戸があるんだよ。で、風呂は水さえ張れば魔石でお湯にできるけど、その水は人力で井戸から運ばなきゃいけないわけ。だからよ」

「成程な。じゃあ、風呂を使うときだけ鍵をかけるようにしてくれ。鍵がかかっているときは門が使えない様にする。で、普段はいつでも使えるように鍵を開けておいてくれ。登録した人間以外は、鍵が開いていても扉が開かない様にしておくから。……バルト、できるだろ？」

「勿論」

「じゃあ、そういうことで。頼んだぞ」

「了解」

「分かりました。買い出しの間に行っておきますね。ついでに足りない食器とか椅子も持ってきます」

「あ、それは助かる。よろしくお願いね」

「はい。では早速取りかかってきます」

「食い物以外でいるものはあるか？」

「ダビ酒と煙草お願い。銘柄はこれ」

玄関脇の棚に置きっぱなしにしていた煙草の空き箱をケデイに軽く投げる。苦笑して受け取った煙草の箱を持つ手を後ろ手にヒラヒラ振りながら、ヴォルフを連れて玄関を出ていった。

騎獣を使えば、おそらく一時間もしないうちに戻ってくるだろう。それまでに作れる簡単な、かつ栄養価が高くて食べやすいスープのレシピを思い浮かべる。

先に台所に入っていたウィルと合流しようとする、スカートをツンツンと引かれた。振り返るとヒューが見上げていた。

「俺は何をしたらいいですか？」

「別にすることないし、ご飯まで大人しく寝てな。顔色、まだ悪いよ」

「……俺だけ寝てるのはなんか心苦しいんですけど……」

「そういうのは、まともな顔色になってから言いな。ほれ、ベッドに入って大人しくしとき」

「……えー……」

台所の入口で問答していると、ウィルがひょいっと顔を出した。

「アーチャさんの言うとおりですよ。さっさと寝て下さい。ご飯になったら起こしてあげますから」

「……分かった」

ヒューがもそもそとベッドに潜り込むのを確認すると、ウィルと目を合わせてお互い肩を竦めた。

十四話（後書き）

中途半端な長さになりそうなので、切りました。

十五話

買い出し組が帰還し、彼らが買ってきた惣菜類とアーチャらが作った野菜と牛乳たっぷりシチューがテーブルの上に並ぶ頃には、すっかり窓の外が薄暗くなっていた。

バルトに皆より運んでもらった椅子のお陰で昨夜と異なり全員が座る事が出来るが、なにぶん狭い部屋だ。かなりキツキツで椅子と椅子との間にはあまり余裕がない。両サイドにガタイのいい男に挟まれると、男臭さをひしひしと感じ、正直不快だ。

それを顔に出すことなく、ダビ酒を口にする。酒を飲んでいるのは篤美だけである。

他の人間は実に行儀よく、無言でお世辞にも品が良いとは言えない食事を口に行儀よく、無言でお世辞にも品が良いとは言えない

この場にいる篤美以外は皆貴族なのだろう。

あの熊の様なケディでさえ、きれいに食事する。ガディの店に来るおっさん達とは段違いだ。

篤美とて和食、洋食の食事のマナーくらい最低限心得ているし、マルコ爺にはこちらのマナーを教えてもらい一応形を取りつくろってもらうのことはできる。

が、目の前でこうもお行儀よく食べられると、自分のマナーの洗練されてなさを感じ、早々に食欲が失せた。シチューと焙った肉を一切れ口にして、あとはちびちびとダビ酒を飲みながら目の前の食事がなくなるのを待った。

飯を食いながら話そうと言ったが、これは無理だろう。

彼らのお上品っぷりにうんざりしながら、やさぐれた気分になる。

(おーおー、育ちがいいこった……)

ダビ酒を一本飲み干し、二本目を取りに行こうかと席を立ち、台所に向かう。ついでにお茶のおかわりがあるだろう。少し温くなったお湯が入ったケトルを再び火にかけ、ティーポットの茶葉を新しいものに変える。

ポットにたっぷりお茶を入れ戻ると、丁度食事を終えたところのようだ。テーブルいっぱいに広がっていた食べ物はきれいに食べ尽くされていた。

ウィルとバルトに手伝ってもらって使った食器を全て台所に運ぶ。濡らした布巾を台所からケディに投げ、篤美は食器を水を張った盥につける。洗うのは別に明日の朝でも構わないだろう。二人を促し部屋に戻った。

テーブルはきちんと拭かれ、お茶の注がれたカップとティーポット、篤美のダビ酒だけがテーブルの上にあった。

「さてと、話の続きをしようかね」

「ああ、こちらとしては喜劇の魔術師の身柄を拘束するまでヒューを匿ってもらいたい」

「分かっている。ヒューを匿うついで一つ提案があるんだけど」

「何でしょう?」

「一人暮らしの女の家に突然男の子が増えたら周囲は訝しむし、敵さんからしてみりゃ、あからさまに怪しいだろう? だからヒューには私の孫娘になってもらう」

「「「……は？」」」

悪だくみするようにニヤア、と笑って言うと、ヒューとウィル、バルトは声を揃えて愕然としていた。ヴォルフも声は出していないが、何かおかしなものを聞いたというような顔で目を見開いていた。

予想通りのリアクションにニヤニヤする。

唯一ケイだけが、こちらの考えをすぐに察したのか、右眉だけを器用にあげるとニヤリと笑った。

存外彼は頭の回転が速いらしい。少なくとも他の若いのに比べれば。

「成程な。悪くない」

「えっ!？」

「だろう?」

「……孫娘って……ヒューが女の子のフリをするってことですよね……ああ、成程。確かにいい手かも」

ウィルも察したのだろう。少し複雑な顔をしているが、納得するよ
うに頷いていた。

「逃がした魔術師は多分暗殺失敗を報告するだろう?何を考えているか分からんような愉快犯なら言わない可能性もないわけじゃないが、ヒューが子供になったことを向こうが知っているといるという前提で動いた方がいい。皆に子供がいりゃ、嫌でも目立つから私が匿うんだろ?ならやるならば徹底的に」

「ヒューの子供の頃の姿を知っている奴が来るとは思えんから、赤毛、緑眼を目印に7〜8歳の男児を探すはずだ」

「なら最初っから男の子ではなく女の子を装っていれば見つかる可能性が下がる。この国じゃ赤毛も緑眼も割と多いですからし、まさか該当するような子供を全て皆殺しにするようなことはしないでしようし、多少は調べてから事にあたるでしょうね」

「まさか誇り高い騎士団長様が女装するなんて、常識的に考えてありえないだろう？ 勿論ヒューが特殊な趣味を持っていれば別だけど。絶対に見つからないとはいえないが、多少の時間稼ぎはできる。その間にその魔術師を捕まえりゃいい」

「そんな趣味持つてませんよ……いや、確かにいい手かもしれないんですけど……ものすごく嫌なんですけど」

「大丈夫。28歳成人男性の女装なら見るに耐えないだろうけど、今はアンタ可愛い顔してるし細いし小さいし喉仏もまだないし。可愛いスカートを穿いたら絶対女の子にしか見えないから」

「かけらも嬉しくありません」

「バルト、ヒューの髪伸ばせるか？」

「できますけど……ヒュー様はいいんですか？」

盛大に引き攣った顔をしているヒューにバルトが困った顔をして聞いた。

「できれば勘弁してもらいたいんだけど……けど、策として確かにいいね……チュルガを離れるわけにはいかないし。かといって何処かに閉じこもっているわけにもいかないし」

頭を抱えて、嫌、嫌だけど、ものすごく嫌だけどっ……とブツブツ呟くヒューや困ったような顔の若い騎士達、ニヤニヤしているオッサンの様子に少し意外な気がした。

「なんか意外と平然としてるわね。てつきり馬鹿にするな！とか怒りだすかと思ってたんだけど」

「騎士って言っても、何もいつも形式ばって王城の警備やらやっているわけじゃない。戦なんぞないからな、それこそ街の治安維持からはぐれ魔獣退治、迷子探しまで割となんでもありなんだよ。場合によっちゃ、捜査のために変装もするし潜入もする。こいつ等も実際、従者時代にゃ、一度やってるからな」

「……騎士団ってのは何でも屋かよ」

「国の安全、国民の安全の為ならな。ああ、もちろん近衛は王族・王城の護衛、治安維持が第一だから、アレだけは少し違っぜ」

「……もっと嫌がると思ってたのに……つまらん」

騎士団が意外なほど市民と身近だったことに驚いた。そういえば街ではよく騎士を見かけるし、自警団や警備隊なんかの機関の話や

いたことがない。騎士団が全てカバーしているのだろう。ド田舎の村にも必ず小さな詰め所があって、交替で騎士が廻っているそうだ。古着屋で思いついた時、敵を欺けられて篤美の危険に巻き込まれる可能性が下がるし、尚且つ王族に嫌がらせ（羞恥プレイ強要）ができて大変愉快だと思ったのに、騎士団が元からそういうことがあるなら、当初期待していたほどの面白みもない。まあ、精々騎士団長自らって点くらいだ。なんだか面白くなってダビ酒を呷る。期待はずれだ。

「嫌ですけど……背に腹は代えられません……嫌ですけどっ!!」

ヒューに目をやると、それはそれは嫌そうに顔を歪めて、大きな溜息を吐いた。と思うと頭を抱えた。俺もう28なのにな……騎士団長なのにな……と頭を抱えてブツブツ呟き始めたヒューをウィルが困った顔で宥めている。しかし、その口元は笑いを我慢するかのようにピクピク痙攣していた。間違いなく彼も面白がっているのだろう。

……やっぱりつまらん。もっと嫌がればいいのに。

ケディから受け取っていた新しい煙草をスカートのポケットから取り出し、火をつけた。そして、吸い込んだ紫煙を細く吐き出す。

「反応が対して面白くもなかったから、話を進めるよ」

「……面白くないって……」

顔を引き攣らせるヒューを無視して、ガディに今朝話した設定を口

にする。

「設定としては、だ。ヒューは私の息子の娘だ。成人と共に家を出ていったバカ息子が突然訪ねてきたと思ったら、今は旅の商隊の護衛をやっけていて、偶然この街で母親を見かけた。いつもは子供を嫁に預けて旅に出ていたが、その嫁が死んでしまい、預けられる知り合いもいなかったため子連れで旅をしていた。しかし、幼い子供は旅には足手まといだし、どうしたものかと悩んでいるときに母親を見つけ、これ幸いと預けていった。ってな感じでどう？働いている店の主人には特に不審には思われなかったんだけど。慣れない旅の疲れで熱があるから休ませて欲しいって言ったら、気の毒がって今日一日休みを貰うはずが三日も休みをくれっちゃたし。慣れないことだらけで大変だろうから、せめて初めの二、三日は側にいてやんなってさ」

「悪くないな」

「元に戻ったときは、息子が再婚するから引き取りにきたって言えばいいし。女の子用の服も買ってきてあるから。……ああ、ウチの店は昼から深夜までなんだよ。店の主人、ガデイさんっていうんだけど、彼が子供だから給金は半分しかないけどヒューも店で働かせてもいいって。酒が出る時間帯は店の奥で預ってくれらしい。この子くらいの年頃じゃ、すでに働いてる子はいらね。家に閉じこもってるより、街に馴染んどいた方が何かといいだろう？」

「手筈がいいな。だとよ、ヒュー。どうする？」

「……それでいくしかないでしょ。アーチャ、ご迷惑をおかけしますが、よろしくお願いします」

「あいよ。私のことはそのままアーチャと呼んでくれればいい。…お婆ちゃんと呼んだら、殴る」

「……………何ですか？」

「一気に歳とつた気がするから嫌だ」

「……………そういうもんなんですか？」

「女心つてやつだよ。アンタの名前はヒュー・タニージャでいいだろ。ヘタに新しい名前をつけてボロがでて困るし」

「分かりました」

「顔色が悪いから明日は一日家にいるけど、明後日は街に行くよ。ガデイさんとここに挨拶に行かなきゃならんし、街の子供を観察していた方がいい。引つ込み思案の大人しい子つてしときゃ多少誤魔化せるが、街の子供にしちゃ食べ方も動作も洗練されてるからね。貴族の子供なら問題もないだろうけど、街の中じゃあ浮いちまう。それは嫌だろう？」

「そうですね。極力目立ちたくはありませんし、この年頃の女の子なんて今まで関わったことがありませんから、どんな行動をとるのか見当もつきませんし」

「なら尚更観察する必要があるね」

「はー」

「店からの帰りには目立たないように護衛をつけさせてもらっせ。あとは一般的に見て普通に生活してもらって構わない。何かあってもすぐに対応できるように、毎日誰かしら顔を出したいんだが、構わないか？」

「別にいいよ」

「じゃあ、そういうことでよろしく頼む」

「よろしくお願いします」

ヒューが頭を下げると、一緒に皆が私に頭を下げた。

「こっちこそ、よろしく頼むよ」

篤美の奇妙な同居生活が幕を揚げた。

十五話（後書き）

次回より同居編がスタートです。

……ここまで長かった……

十六話（前書き）

更新に間が空いてしまい申し訳ありません。
今回は短いです。

十六話

カーキ色のワンピースを着た、黒髪の、中年にさしかかったくらいの年齢の女が市場を歩いていて、すすいと器用に人ごみの中をすり抜け、流れる様に歩く人波の誰ともぶつかることなく歩いて行く。その後ろを夕陽のような赤毛をみつあみにした少女が早足で追いかける。

中性的な可愛らしい顔立ちの少女は、萌葱色のスカートをひらひらさせながら、先を歩く女を見失わない様に彼女の背中を見つめながら足を動かしていた。

篤美とヒューは市場に来ていた。

出勤前に昼食をとり、日用品や食料を買い込むためだ。

篤美の家での騎士団の連中も交えた話し合いから一週間の時が経っていた。

ヒューを匿うようになってから一週間。

ヒューの順応性の高さから、意外なほど問題なく過ぎていた。バルトの魔術によって腰の長さまで伸ばした髪と可愛らしい顔立ちも相俟って、スカートを穿けば彼は女の子以外の何物にも見えなかった。

寝床は野営用の寝袋を持ちこみ、彼はそこで眠る。

彼自身が言い出したことだが、当然ながら篤美自身も彼にベットを譲る気もなければ、共に使うという選択肢すらなかった。今は子供の姿だが、彼は20代後半のいい歳した男なのだ。

騎士という職業柄、野営には慣れているはずであるし、厄介事の方

際で、女性であり、家主である篤美をさしおいてベットを使うなんてことを許す程篤美は優しくなければ心も広くない。

……非道と言いたければ言えればいい。

女子供には基本的には優しくするのがポリシーだが、大の男のことなんざ知ったことではない。くだいようだが、確かに見た目は可愛らしい子供だが、彼は成人男性だ。

篤美が優しく庇護する対象からは、完全に範疇外だ。

よって彼との同居生活は、外での演技は別にして、篤美的には適切な距離のあるものであった。

元々過度にかまったりするタイプではないし（どちらかというドライな方だ）、篤美と彼の関係はあくまで協力者。報酬が約束されていることも考えると、この今の関係は契約に基づく職務のようなものだ。

彼もそれを分かっているのか、それとも篤美の必要以上に構うなオラを感じているのか、基本的に必要なこと以外の会話や接触はない。

昼過ぎから深夜までお世話になっているガデイさんのお店でも、ただだったの数日しか経っていないが中々に馴染んで、ガデイさん一家や常連のオッサン達に可愛がられている。

酒がメインになりだすギリギリの時間まで篤美と共に接客をしているが、料理を運ぶたびに頭を撫でられたり飴やちよつとした菓子を貰っている姿を横目で見る度、それでいいのか騎士団長……と内心思うが、面白いので放置している。

最初の二日ほど店の雰囲気や料理を運ぶなどの接客、常連のオッサン達に戸惑っていたようだが、元々愛想がいい方なのか、順応性が異様に高いのか、すぐに馴染んでいた。

……本当にそれでいいのか、騎士団長。

店からの帰り道は基本的には二人で歩いて帰るが、後ろから騎士団の人間が一人ないし二人、騎士団の服装ではなく一般的な庶民の服を着て家まで着いてくる。

初日はストーカーかよ、と思ったが、堂々と迎えに来られるよりはるかにマシなので放って置いている。

家に戻れば、大概ケイカウイル、ヴォルフ、バルトの誰かがいた。表向きには二人暮らしの為、室内の明かりは点けずに暗い部屋の中から出迎えられ、帰宅した篤美達にダビ酒やお茶を用意し、その日一日の報告や調査の進行状況、ヒューの領主や騎士団長としての書類仕事をどっさり置き、処理済みのものを持って帰る。

騎士団連中が話しをしている間に風呂の準備をし（水はバルトの魔術で、わざわざ井戸に汲みに行かずともよくなった）、寝巻き用の浴衣を縫う作業をする。

彼らの用事が終わり、風呂場の裏口を通って帰ると、順番に入浴し、明かりを消して就寝する。

掃除や洗濯、炊事は基本的に分担して行っている。

やり方さえ教えればすぐに上手くできるようになったし、そもそも彼は正式に騎士になる前には従者として人に仕えていたこともあり、掃除やお茶を淹れたりすることは篤美よりも上手かった。

午前中に家事をすませ、空いた時間でヒューは書類仕事をし、篤美は本を読んだり庭の手入れをしたりと、早くも生活がルーティン化しだしていた。

自分のペースで市場を歩いていると、後ろのヒューが人ごみに埋もれて遅れがちになっていることに気づいた。

道の真ん中で止まるのはよろしくないが、かといってはぐれると面倒なので仕方がなくその場で立ち止まる。そう時間もかからず、髪を少々乱したヒューが追いついた。

「すみません」

「別に構わんよ。さっさと飯を買って広場に行こう。今日は人が多すぎる」

「はい」

「それから、『すみません』じゃなくて『ごめんなさい』だよ。祖母に『すみません』なんて謝る街中の子供なんて中々いないからね」

「はい。ごめんなさい」

「ん。じゃあ、行くよ」

「はい」

ハートウォーミングな疑似家族物語やよくある恋愛ものじゃ、はぐれないように手を繋ぐようなシーンではあるが、生憎そのどちらにもする気が微塵もないのでさっさと歩きだす。

わざわざ確認せずともヒューは着いてくるし、気遣ってやらずとも自分でなんとかしている。(だって成人男性だし)

もつと庶民生活にオタオタすれば面白いのに、それもほとんどない。本当に王子様なのか、疑わしいほどの馴染みっぷりを披露している。言葉づかいさえ注意すれば、躰のいい可愛らしいお嬢ちゃんだ。

途中で見かけた露店でホットドックのようなものと果実水を買って、広場にある木陰に座り昼食をとる。

甘辛いソースと肉汁があふれる腸詰がやや堅めのパンに合っていて、中々美味い。無言で並んで食べる。チラッと横を見れば、豪快に大口開けてパンにかぶりつくヒューがいた。

見た目が可愛い女の子であることや実は王子様であることを考えれば、中々どうして残念な光景だが、こんな所で屋台で売っているようなものをお行儀良く食べられたんじゃ、こっちの食欲が失せてしまうだろうから、これはこれで良しとする。

食事は時と場合によって、それに相応しい食べ方をすべきだ。ホットドックもどきの様なジャンクフードみたいなものは、豪快にかぶりついた方が気分的にも美味い。

庶民演技か、ヒューも同じように考えるタイプなのか、ただ単にそれが素なのか、それは分からないが、なんとなく、悪くないなと思つた。……別に絆された訳ではないが、しばらく共にいる必要がある以上、不快なことは少ない方がいい。

隣で行儀悪く頬いっぱい膨らませてモグモグしているヒューに習うように、篤美も豪快にパンにかぶりついた。

十六話（後書き）

10 / 20 一部修正

十七話

広場で早めの昼食をとった後、食料品をいくつか買い込み、その荷物を抱えて職場であるガデイの店へと向かった。

さっさと自分のペースで歩く篤美を2、3歩遅れて早足で追いかけるヒューの姿は、もはやデフォルトのようになっていた。

「こんにちは」

「こんにちは」

「おう！今日もよろしく頼む」

「よろしくお願ひします」

「お願ひします」

店に入り、店主のガデイに挨拶する度に、ガデイがヒューの頭を分厚い火傷や切り傷の痕のある大きな手でガシガシ撫でる姿も見慣れたものになりつつあった。ヒュー本人は複雑そうな顔をしているため、傍から見ていて少々面白い。

一旦店の奥へはいり、揃いのエプロンをつける。仕込みが粗方終わっており、店内にはスープのいい香りが広がっていた。

今日のお勧めはタミラ肉のシチューらしい。

篤美が開店の看板を店先に置くと、待つてましたと言わんばかりに腹をすかせた常連たちがガヤガヤ喋りながら店に入ってきた。

忙しい時間の始まりだ。

一日の仕事を終え、カンテラで足元を照らしながら二人歩いて帰る。昼間はヒューのペースなど考えずに歩くが、夜はさすがに彼の歩みに合わせる。街中ならば家々から若干の明かりが漏れているが、それとて心もとなくなっている時間帯であるし、街中から出てしまえば、基本的に道の左右には畑が広がっているだけで、光源といえるものはほぼ月明かりくらいしかない。もとの世界のように道がきちんと整備されているとは言い難いため、足元を照らさねば何に足を引っ掛けて転ぶか分かったもんじやない。首都や大きな街道はさすがに道に石畳が敷かれ、かなり整備されているが、チュルガという街は国の最西端。要は田舎だ。そこまでインフラが整っているわけではない。仕方なく夜道だけは肩を並べて歩く。

離れた森から聞こえるざわざわという音以外は、二人の足音と後ろからついてくる騎士の足音しかない。ここ一週間、二人とも無言で家まで歩くのが常であったが、今日はヒューが口を開いた。

「……あの」

「ん？」

「前から聞くことと思ってたんですけど……」

「なに」

「なんでこんなに街から離れた所に住んでるんですか？」

「面倒だから」

「……毎日片道1ティン（1時間）も歩く方が面倒じゃないんですか？」

「歩くのは別に。面倒なのは人づきあい」

「人づきあい」

「街中で暮らしたらご近所さんができるだろ。そしたらご近所付き合いなきゃいけない。うまくご近所付き合いしないと暮らしにくくなる。どこの街でもそうだろ？いくらこの街が人の出入りの多い街だからといって古くから住んでいる人がいない訳じゃないし、この街はいい意味でも悪い意味でも田舎だ。いくら栄えた街であつたって田舎つてのはそういうのが面倒だつたるするんだよ」

「そんなもんですか」

「そんなもん。縦と横のつながりつてのは便利な半面、しがらみが出来て面倒だ。アンタらとて、王族やら貴族だつて正直かなり面倒だろ」

「……確かにそうですね」

「素直だね」

「実際そうですから」

「共同体ってのはそんなもんさ」

「共同体」

「国家だ都市だお貴族さまだ平民だっているいろいろ分けちゃいるが、要は全ては共同体だ。夫婦あるいは家族という最小単位の共同体から血族集団、村落共同体、街あるいは都市共同体と徐々に広がり、そしてそれらが集まって国家という大きな共同体になる。国ってやつは様々な大きさの共同体をそこに内包して成り立ってるんだよ。そしてそれぞれの共同体には国家という最大の共同体からの明示された決まりごと以外に、小さな共同体内で明示される、あるいは暗黙のうちで了承されている決まり事ってのがある。よそ者がすでにある共同体に入り込もうとしたら、よつぽど上手く立ち回るか、時間をかけない限り、その共同体からは排除されちまうもんなんだよ」

「そう………なんですか？」

「ま、これは国家や共同社会に対する一つの考えただけだね。誰の考えかは忘れちまったよ。学んだのはもう随分前だからね」

「……アーチャは元の世界では裕福だったんですか？」

「なんだい、突然。私の家はご先祖様からずっとド庶民だよ」

「しかし今のお話を聞く限り、かなりの教育を受けてらっしゃるんじゃないですか？」

「あー……、確か、この国じゃ一般庶民も含めた教育に力を入れたのは先代からだっけ」

「はい。先代の陛下、より正確に言うと正妃殿下が知識人でいらしたので、この国の貴族を中心とした上級階級しか教育を受けられないというそれまでの教育体制を憂い、庶民も教育を受けられるよう神殿を中心に初等教育が受けられる無償の学校をお創りになりました」

「けど、そこからのより専門的教育や学術研究は金持ちにしかできない」

「はい、残念ながら」

「先代王妃つてことは大体4、50年前くらいか。まあ大抵の先進国は教育制度が確立されて久しいくらいだな。私の国じゃ初等教育として6年間、中等教育3年間は義務として教育を受けるんだよ。そっからさらに望めば高等教育3年、より専門的な大学での4年、研究者になろうと思ったら更に続く。私は一応大学までは行ってたからね」

「……そんなに何年も学ぶのですか？では、いつ働くのですか？」

「早い人だと中学、高校をでてから。遅けりゃ大学やその上の大学院を卒業してからだね。大学を出てからだど、留年しなけりゃ22歳で本格的に働き始めるね」

「22歳……随分遅いですね」

「そりゃね。それこそ10代前半から弟子入りやら奉公やらで働きだすのが普通なこっちの世界からしたら遅いだろうよ。私の国でもそういう時代があつたが、今は随分豊かな国になつたからね。子供を労力に数えなくて済むようになった分、教育に力を入れられるんだよ」

「……いい国だったのですね」

「ま、問題がなかつたわけじゃないが、それでも40年近く暮らした国だからね。愛着や郷愁は今でもあるさ」

「……帰りたいですか？」

「……愚問だね。聞くもんじゃないよ。どうしたって不可能なんだから」

「……はい……すみません」

「別に謝らんでもいい」

「……はい」

「辛気臭いツラすんな。むさい野郎どもが待つてる家まであと少しなんだ。さつさと風呂入って酒飲んで寝るよ。明日も仕事だ」

「む、むざいつて……」

「むさいだろっ?」

「確かにむさいですけど……」

「私としてはあんなむさい奴らより、可愛らしい女の子に出迎えて
もらいたいもんだね」

「それは激しく同意します」

「……このむっつりめ……」

「むっ……違います」

「気にするな、むっつり。男なら当然だよ、むっつり」

「むっつりじゃありません!」

「うんうん。分かっているよ、むっつり」

「だから違います!! 連呼は止めて下さい」

久々に誰かと会話する道のりは、普段よりもずっと短く感じた。

「分かったよ、むっつり」

「全然分かってないっ……!!」

ほんの少し歩み寄った一週間目の夜道での出来事。

十八話（前書き）

とある人物視点

十八話

思えばろくでもない人生だった。

裕福な商家の二女として生まれたが、優秀で明るく美人な姉や弟に比べると、地味な容姿に引っ込み思案で暗い性格な自分。

当然ながら子供の頃から二人と比べられ続け、陰にあらさまに周囲から馬鹿にされてきた（捨て子疑惑も当然噂された）。

実の両親や使用人たちは、初めての子であり美しい容姿で明るく笑顔の素敵な姉や末っ子長男のやはり容姿の整った優秀な弟を可愛がり、地味な二女のことなど存在をも忘れてのことすらあった。

容姿は当然ながら、勉強も運動も商売の手伝いも何もかも二人には敵わなかった。

おしゃべりがあまり得意ではなかったし、愛想笑いもうまくできなかった。

それでも愛されようと自分なりに努力した時代もあったが結果は芳しくなく、14歳の時には諦め、地味に地味に鬱々と生きてきた。

そんな鬱屈した私にも春がきた。

不出来ながらも実家の手伝いをしていた時に出会った年上の彼は、

優しく男前な素敵な人で、こんな地味で根暗な女でも愛していると
言ってくれて、さらには結婚まで申し込んでくれた。

美しい姉は実家よりも裕福な家に既に嫁いでいたし、実家自体は弟
が継ぐことに決まっていたため、彼には私自身しか差し上げること
ができるものがなかった。

それでも構わない、君さえ傍にいてくれたらそれでいい、と微笑ん
で抱きしめてくれた彼の腕の中で歓喜の涙を流した。

幸せだった。誰にもまともに相手にされなかった私だけを見てくれ
る彼との交際。

結婚が決まってからは（実家の両親はあっさり了承。むしろそうい
えば結婚してなかったな、すっかり忘れていた、という反応）、準
備で非常に慌ただしい日々だったがそれすら楽しく、日常の何気な
い事にも幸せを感じるような毎日だった。

結婚式当日。

もしかしたら一生着ることがないかもしれないとさえ思っていた美
しい純白の花嫁衣装に身を包み、幸せを噛み締めていた。

隣には同じく純白の花嫁衣装に身を包み、微笑む素敵な彼。

彼は小さいけれど小間物屋をしている。

結婚したら毎日彼の仕事を手伝い、店の二階の自宅で彼の為にご飯
を作ってあげるのだ。

子供はどうだろう。……彼との子供ならば何人だって構わない。き
つと彼と共に精一杯愛してあげる。

絵に描いたような幸せな家庭を作っていくのだ。

彼さえいれば、どんな苦勞もきつと気にならない。これから共に生
きて、共に年老いて、幸せだったね、って笑い合いながら共に死ん

でいくのだ。

ああ、なんて素敵なんだろう。

彼と歩む人生がこれから始まるのだ。

彼と並んで神官の前に立つ。

これから創世神の神々に永遠の愛を誓うのだ。

私たちの後ろにはそれぞれの親戚が肅々と座り、誓いの儀を見守っている。

ああ、いよいよだ。

目の前の神官が神々を讃える言葉を紡いでいる。この後、永遠の愛を誓うか問われる。

神官の言葉に二人で誓ったその瞬間から私たちは祝福される夫婦になる！！

「……汝タイラー・マーク、並びに汝アリア・バークレー、我らが愛する神々にその永遠の愛を誓うか？」

「誓いま……待った！！」

後ろの親族席から誓いを遮る大声が式場である神殿内に響いた。

驚いて二人揃って振り向けば、一人の人間が立ちあがり、壇上の私たちに早足で近づいてきた。

そこからはあつという間だった。

「タイラー！貴方のことを心から愛している！結婚をやめて一緒に

逃げてほしい!!」

「ああ……嬉しいよ。俺も君のことを愛している。一緒に行こう!!」

そうして手に手を取り合って神殿から走り去る二人。

突然のことに呆気にとられていた参列者は、二人の姿が見えないところまで走り去った後で、蜂の巣をつついたような騒ぎになった。主に騒いでいるのは、私の両親たち。

……彼の手を取り神殿から走り去ったのは、私の実の弟だった。

気がつけば私は知らない場所を歩いていた。

街の中心にある神殿にいたはずなのに、森に沿った寂しい道を歩いていた。

周りを見ると、森と青々を広がる畑しか見えない。

(……どこ?)

何故こんな場所にいるのか、皆目見当がつかなかった。

それでも、足は歩みを止めない。

立ち止まろう。神殿に戻ろう。……彼の元へ戻ろう。

そう思うのに、自分の足が意思とは関係なく勝手に動く。

本当なら彼の家で今頃幸せに笑い合っているはずなのに、なんで私はこんなところを歩いているのだろう。

結婚式は昼過ぎからだった。

なのに今はもう日暮れ前だ。徐々に空の色が変化していく。

機械的に動かしていた足が限界を迎えたのか、もつれてそのまま道に倒れ込んだ。

せっかく真つ白だった花嫁衣装が土に汚れてしまう。

すぐに立ちあがらなきゃ、と思うのに身体が重くて立ちあがる事ができない。

このまま夜が来れば、こんな民家から離れて森に近い場所ならばぐれ魔獣が来るかもしれない。

もしかしたら最近街に出るといふ夜盗が来て、身ぐるみを剥がされ

たうえで殺されるかもしれない。

（ああ、それでもいいかも）

なんだか、どうなったって構わない気がしてきた。

言いようがないほど疲れていた。

せつかくきれいにしたのに汚れてみっともなくなってしまうていた。
私の隣には誰もいない。

彼も。家族も。

本当に、どうしようもなく疲れてしまった。

（幸せになりたかったのになあ……）

疲れた息を一つ吐き出して、固く埃臭い地面に頬をつけたまま、私は一人臉を閉じた。

十九話（前書き）

ウイル視点

十九話

ウィルは処理済みで団長の確認待ちの書類の束を抱えて、騎士団長の執務室へと入った。

部屋の主がこの場から姿を消して一週間以上の時間がたった。部屋の調度品は中々に質のいいものを揃えているが、部屋を使う人間がおらず使わない部屋の掃除に回せるほどの人出がないこともあって、うっすら埃が積もり始めていた。

日が落ち始め、茜色に照らされた部屋を通り抜け、続き部屋である仮眠室の扉を開く。

扉を通り抜ければ、そこは自分の上司がお世話になっている家の風呂場だった。

普段なら誰もいないため何の声もかけずに部屋にお邪魔するが、今日は仕事が休みだと言っていたため、上司共々家主も部屋にいるだろう。

「こんにちは。お邪魔します」

と、声をかけてから風呂場から廊下へと続く扉を開けた。

家に一部屋しかないと居間兼寝室兼食堂である部屋に入ると、テーブルに突っ伏して、なにやらしょげたような空気を背負ったヒューの姿しか見えなかった。

テーブルの上に両腕を投げ出し、足を行儀悪くブラブラさせている。パツと見は子供らしく可愛らしい光景だが、中身は30間近のいい歳した男だ。

ついでに幼馴染であり、上司でもある。

何とも言い難い微妙な心境を隠すように、笑顔を浮かべて彼に声をかけた。

「失礼します。ヒューだけですか？」

「やあ、ウィル。今は俺だけだよ」

「アーチャさんはどちらに？」

「散歩だつて言つて半ティンくらい前に出てった」

「もうすぐ夕飯の時間ですし、なによりもう日が暮れるのに？」

「俺もそう言つたけど、気分だからって……」

「近所を歩くくらいならすぐに帰ってきますね。それなら夕飯の支度でもしてますか……」

「……戻るのは2ティン(2時間)くらいしてからだつて」

「はい？」

「……夜歩くのが好きなんだって。けど最近ごたついてるから真夜中に歩くのは自重してるんだって」

「……で、夕方からまだ比較的遅くない時間帯にかけて歩いてくると?」

「そう……ついでに一人で歩くのが好きなんだって」

「一緒に行くのは断られた、と」

「……一応粘ったけど」

「奮闘の甲斐なく置いていかれた、と」

「……………うん」

「女性一人でこんな時間帯から2ティンも外を歩かせるなんて。ヒュー。確かに今の貴方は子供の姿かも知れませんが、れっきとした騎士なんですよ。いくら断られたって勝手に後ろをついていくなりしてくださいよ。断られたからって諦めるなんていい歳した男が情けない」

「……………うう、すみません」

「僕に謝ってどうするんです。いくら一人で歩くのが好きとはいえ、特に今はまだ喜劇の魔術師も捕まってませんし、この忙しい時に夜盗まで出やがるし。なにかと物騒なんですから。」

「う、はい……………」

「何をしよげてるかと思えば全く……」

「……別にしよげてないよ」

「じゃあ、いい歳して拗ねてたんですね」

「……拗ねてないし」

「はいはい。せっかくだと最近になって少しお話して仲良くなったような気がしてたのに、置いていかれて残念でしたね。ほら、拗ねてないでとつとと迎えにいきますよ」

「……だから別に拗ねてないって」

そんなやりとりをしているうちに、窓の外を見ればかなり薄暗くなりつつあった。

拗ねたように唇を尖らす少女（中身は30間近の男）を急かして、出掛ける準備を手早く済ませる。

完全に暗くなつたときの為にカンテラを持ち、念のため腰の剣を確認する。

ヒューが自身のスカートに、子供の姿でも比較的使いやすい短剣を仕込むのを見届けると、玄関の戸を開けた。

玄関を開けた目の前に、薄汚れた花嫁衣装を身に付けた女性を背負つた（背負い切れておらず、半ば引きずるような形で）肩で息するアーチャが立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7990s/>

夜の散歩

2011年10月22日02時15分発行